

凡そ現代の世界的商品は織物と金屬品とである。しかしわが日本では殆んど鐵を有せず、亦石炭資源も頗る不十分であるため、金屬工業を大いに發展せしむること殆んど見込みがない。これに反して、わが國には纖維工業の作業に適應した多くの勞働を有するから、勢ひわが工業は纖維工業を基本的のものとなすの外ない。現にまた左表の示すごとく、わが國工業品中、紡織工業品が全工業生産中の三割七分を占むるのみならず、殊に貿易工業品中にあつては、紡織工業品が輸出額の六割三分を占め、もつていかに紡織工業が日本の代表的工業であり、かつそれがいかに海外市場に依存せるかを知るべきである。なほ全體としてのわが工業製品の輸出比率は三割五分の高率を示し、外國市場依存性の特に高かるべきイギリスの三割よりも更に高く、アメリカの八分に比すれば著しき相違である。かくのごとく日本の經濟は、その工業生産に於ても主として世界經濟に依存してゐるものであるが、殊にその代表工業たる織物の纖維工業に於て甚だしきを知り得るのである。

工業種別	生産額	生産額	製品輸出額	輸出額	輸出比率
	(單位千圓)	構成比	(單位千圓)	構成比	
紡織工業	3,029,200	56.8	1,070,300	53.0	35.1

食料品工業	995,100	13.0	113,679	6.7	11.4
化學工業	1,385,100	16.7	137,407	8.1	9.9
機械工業	805,100	9.7	75,004	4.4	9.3
金屬工業	906,100	11.4	83,623	4.9	8.8
窯業	268,100	3.1	58,356	3.4	21.8
其他	861,100	10.0	159,505	9.4	19.3
計	8,175,300	100.0	1,697,906	100.0	20.5

備考 昭和八年度分を示す

しかして纖維工業品中絹織物は富有なる歐米が主たる需要者であるが、本來絹織物の重なる部分は流行に左右せられる嗜好品であるけれども、日本が急激に變遷する歐米の嗜好に適應するやうに生産し、もしくはその趣味嗜好を指導開發して行くといふことは決して容易ではない。しかしこれに反して、綿製品若くは絹製品の世界的需要の中心は印度及支那であつて、その他一體にアジア地方にその需要が多く、またこれ等の地方は金屬品よりも纖維工業品の需要が遙かに多いのである。従つて日本が商工業國として發達するには、綿製品若くは人絹製品工業に於て粗製より漸次精製にすむことが必要であると同時に、これがためには、獨り機械的なる技術の發達を

必要とするのみでなく、これ等外國の需要者の趣味流行を支配するの地位に立たねばならぬ。しかしわが日本がフランスと競争して、歐米人に對し絹織物の趣味流行の中心となることは到底望み難いけれども、アジアに對しこれ等の纖維工業品に關して趣味流行を指導することは必ずしも至難ではない。ただ從來日本は一般の藝術についても歐米の模倣に急であつて、日本よりアジア方面に輸出するものすら、歐米品を模造してしかも品質が遙かに彼に及ばないものが多かつたのであるが、本來歐米人は、眞にアジアの生活慣習を理解して、その日常生活の需要を充たすに遺憾なき生産をなすことが殆んど不能であるに反して、わが國民の嗜好と生活慣習とは、本來支那印度のそれを攝取同化して更にこれを地方化し民族的ならしめたものであるから、根本に於ては彼我共通の點が頗る多いのである。故に日本が今後アジア各地方の趣味流行の開発指導に向つて進むことはさまで難事ではない。即ち元來これ等の地方はわが國と物質生活の根本に於て一致し、國民生活の體容に於て多くの共通性を有してゐるから、いづれの商品にせよ、多少生産品に適宜の改良を施したならば、あなたがち輸出品として特別の生産をなさなくとも、製品をして内外共通の販路を保たしむることは比較的容易なるべく、かくして現在家内工業組織による生産品を

して、あくまでアジア市場の需要に適應せしむべく改善を施して進んだならば、こゝに内外共通の大市場が確立し、安んじて大量生産の利益を擧ぐべく企業組織の擴大をなし得るのである。

それに日本のごとく、國內に於ける資源生産力に乏しく、國民生活の必需品に於て主として海外に依存してゐる國にあつては世界經濟が現代に於けるとく獨立主義的に發展するに至つては、なるべくわが國に對する物資の供給をある程度まで自から管理することが必要とならざるを得ない。即ち海外に於ける商業的發展によつて供給上の實權を占握するか、もしくは更に進んで企業投資によつて資源開發に直接關與するを得策とする。凡そ然らざるも、貿易を發展せしむるために於ても、また國內産業の地位を安定せしめ鞏固ならしめるために於ても、海外に於ける商權の樹立乃至投資は緊要の策たるを失はない。しかるにこれが適切なる目的地としては、先づアジアの諸地方を措いて他にこれを求め難いのみならず、同地方はいまや全く天然資源の開發を刻下の急務とし、しかもこれが使命は一にわが日本に課せられてゐるといつてよい。即ちアジア一帯の廣大なる地域内に秘藏せられる經濟資源は殆んど無盡といつてよく、従つて利用すべき物資は殆んど限りなく、收むべき遺利も亦多いのみならず、殊に支那のごときにあつては、その今日

の悲運を匡救するの根本は、一に天然資源を開發し多數國民の生活を安定せしむることにかゝつてゐる。而してこれ等の資源を開發利用して、自國の經濟を培養するの必要に迫られてゐるのは、獨りわが國のみであると同時に、元來この廣大なるアジアに藏有せらるゝ豊富なる物資を、如何にして人類の生活に利用し得べきやを考究することは、わが國の一大使命であつて、この任務を果たすことによつて、はじめて吾人はアジア經濟の支配者たる地位に發展し得るのである。

第五節 東亞經濟の開發と日滿支經濟ブロック

これを要するに、元來日本の貿易は、大體に於て歐米諸國に向つて半製品を輸出し、これより高級工業品並びに原料を輸入し來つたものであつて、いまなほこの貿易が依然として可成りの重要性を有してゐるのであるが、しかしかくては、到底わが國の貿易の基礎を安定せしめ、世界經濟の動向に對應して國民經濟の發展を策することは出來ない。今後は當然日本國民經濟の本質上、歐米貿易は漸次その重要性を減ずるに相違ないが、先づ我が國としては世界人口の過半を占むるアジア市場に向つて極力貿易を發展せしむべく、こゝに確固たる經濟國策を樹立することが

緊要である。しからざれば今後これ等の地方の生産業が漸次發達するに至つたならば、高級工業品では歐米に拮抗することが困難であり、低級工業品では後進國工業品の競争をうくるといふ腹背に敵をうくるの窮境に立たざるを得なくなるであらう。而して日本としては、これ等の地方に於て有利に興し得る事業があれば、むしろ進んでこれに着手し、なるべくアジアの生産を支配するの地位に立つべく努力することが必要である。しかしてかくのごとくにして、日本がアジアの産業を開拓するにしても、目前の収益に多く拘泥せざるがごとき大資本の投資固定は、とかく諸外國の利權爭奪を誘致することとなる危険があると同時に、資本の豊かならざる日本には不適當であるから、むしろ日用品の生産を目的とするところの低級なる工業、または比較的小資本を以つて足るところの中小企業を到るところに於て經營するを得策とする。それにまたかくのごとく彼の地の國民生活に直面したる事業に關與するのみならず、その生産品にしてわが國內にて利用し得べきものはなるべくこれが利用をはかり、なほしからざるものもその供給上の實權は、これを邦人の掌裡に占握することを圖らねばならぬ。従つて例へば、日本と競争關係にある支那の生絲業のごときにしても、むしろ進んで日本の手によつてこれが改善利用を策することが利益であ

る。即ち或は生産過程中の高級に屬する製絲製織の工業を日本に於て多く發達せしめて、支那繭の輸入利用を圖るがとき、いづれにせよこれ等主要物産に對する貿易上、延いてはすべての經濟上に於ける實權を邦人の掌裡に收め、兩國原料の各特質に應じて適宜優良なる製品の生産に努め、長く世界の市場を左右すべく畫策することが必要である。元來生絲のごときは、日本の歐米に對する主要輸出品であつて、製造工業の進歩したる彼の地市場に對しては、更に生産工程をすすめ、特色のある製品の輸出に努力するを要すると同時に、今後に於てもこの種商品以外に歐米に對する主要輸出品を見出すことは容易でないから、絶えず生産の進歩を策すると同時に、市場の統制を圖ることを怠つてはならない。かくのごとくにしてアジア地方の外國貿易は勿論、その國內貿易上にもまでも勢力を及ぼし、自づと經濟上の實權を扶植するに至れば、こゝにはじめてわが國の貿易は確固たる基礎を樹立するを得るに至るのである。

かくのごとくわが國が進んでアジアの産業の開發にあたり、その經濟を支配せんとするに於ては、わが國內の工業は、なるべくこれを高級生産にすゝめ、殊に支那その他に於てわが國自身の興さんとする同種生産業のごときは、益々これを高級に導くことが必要である。いづれにしても

低級品の生産については、後進國自身の能力が漸次進歩すると同時に、日本のこれを生産することの次第に不利益となるは當然の歸結であるから、とにかく從來のごとく粗大の加工をなせる低級品の生産輸出に重きを置くの方針を改めて、更に高級品の生産輸出に努力しなくてはならぬ。もとよりアジア市場に於て現に需要せらるゝ商品の過半は、なほ高級品といふを得ないが、この種製品の需要といへども決して尠くない。現に歐米諸國より供給せらるゝ商品は主として高級品に屬するものであると同時に、今後文化の進むにしたがひ、益々この種製品の需要の増加すべきは論を俟たない。殊に今後日本の力によつて彼の地の豊富なる資源が開發せらるゝに至つたならば、更に如上の傾向を促進せしむるに至るや疑ひを容れない。かくのごとくにして、日本としては生産品の向上技術の進歩に努むると同時に、他方、いまなほ家内工業組織によつて經營せられてゐる幾多の産業は、アジア市場共通の需要を目標としてこれを現代化せしめ、殊に國民生活に直接せる生産品は、極力廉價供給を圖ることに努め、因つて以てアジア民族の生活の向上文化の進歩に寄與すべく邁進することが必要である。かくてこそわが日本たるものは、アジア經濟の支配者たる地位に發展し、かつアジアの指導者として平和保證の任務を全うし得るのである。

上來述ぶるところによつて見れば、資本主義日本國民經濟の特色上、日本の經濟國策は當然東亞經濟聯盟の結成に向つて進むことではなくてはならぬ。殊に世界經濟がブロック經濟化に向つて進みつゝある動向に照らし、海外依存を餘儀なくせられてゐる日本經濟にとつては、この當面せる問題を解決する方途は、先づ一に日滿支間に經濟ブロックを結成せしむることに向つて進むの外ない。これによつて資本主義日本が世界經濟のブロック化に對應するの外なきは、恰かもイギリスがその恐慌發生以來の經濟的難境を、その植民地を糾合して經濟的大英帝國を建設することによつて展開するの外なかつたと全く同様である。しかし差當つてのこれが實現は支那現下の情勢に照して決して容易でない。従つてこゝに於てか、勢ひ日本としては滿洲國に向つて多くを期待せざるを得ないのであつて、最近日滿ブロック經濟論の高調せらるゝに至つたのも畢竟これのために外ならぬ。

しかし日滿經濟關係の現實についてみるに、日本の經濟にとつては滿洲國は商品市場として相當大なる價值を有してゐるけれども、滿洲國の經濟は日本に對する依存性が比較的稀薄であつて、むしろ主として世界經濟に依存してゐると同時に、日本商品の市場價值としても、その資源

がいまだ完全に開發されてゐないのと、住民の大部分が極貧の農民であるがために、いまなほ日本全輸出貿易額に對して一割餘の購買力を有する市場たるに過ぎない。従つて日滿經濟ブロックの結成によつて、世界經濟が封鎖經濟に轉回せんとしてゐることによつて、危急に迫れる資本主義日本の破局を匡救することは到底不可能たるを免れない。しかのみならず、滿洲國は漸くここに獨立國たるの形態を具へるに至つたとはいへ、この獨立を發現せしめた直接の動機たるかの滿洲事變なるものが、いかなる原因によつて招來せられたかといふに、これはいふまでもなく過去十數年間に互り支那の官民間に發生した排日抗日運動の結果に外ならぬ。しかもこの運動は國權回復といふ近代思想を背景としての民族的運動として起つたものであつて、かつ國權の回復は支那にとつては全く近代國家建設の第一使命である。支那は清朝時代までは國民の國家意識が頗る薄弱であつたが、民族主義によつて導かれた革命が達成せられ、統一ある民族國家を成立せしめんとするに至つてよりは、支那の國民意識は内よりもむしろ外に向つて現はれ、國權回復に對する希求が燎原の火の如く熾んとなるに至つたものである。もとよりその排日運動の根本は、支那が自づからの積弱を忘れその傳統的事大思想から脱却し得ないで、近代世界思潮の影響をう

け、徒らに民族主義を發揚せんとするに至つたことに出發せるものであると同時に、従つて彼等の思想中には多分に現實に對する認識不足が含まれてゐることを否定するを得ないが、しかしこの支那の一大思潮は何物の力をもつてしても如何ともし難いものであることを牢記せねばならぬ。従つて日本が滿洲國に對して、これを植民地化せしめんとするがごとき政策をもつて臨むことは、結局支那四億の民心を永久に失ふの結果を招來するものと言はねばならぬ。それに滿洲は從來純然たる支那の植民地であり、いまなほ人口の大部分は漢民族であると同時に、本來彼等は國家意識こそ極めて薄弱であるが、その民族意識に至つては頗る強烈なるを特徴とするのであつて、従つてたとひ支那の政治形態が四分五裂の状態にあつても、それは支那の政治が由來職業政治家の權勢爭奪の具に供せられ、その結果、やゝもすれば、封建的政治形態を呈することとなるのであつて、社會の内部實質を構成せる大多數の國民生活には直接何等の交渉をも有しないのである。されば政治上から見て、不統一なる國情の下にあつても、もし一たびいづれかの地方に於て、民族運動たるの背景を有する排日運動の勃發するがごときことあらんか、旬日ならずしてそれが全國に擴大普及し、遂には支那民族の發展地たる南洋地方にまでも波及するに至るのが從來

の實情である。その上、彼等は郷土的觀念にあつく、常に郷土を中心として團結し、その滿洲に移住せるものも、中流以上の家庭にあつては、その家族の遺骸は必ずこれをその郷里に運び、祖先の墳墓に葬むるのが一般の風習である。従つて滿洲國はたとひ政治上支那と分離して獨立國たるの形態を有するに至つたとはいへ、その人口の大部分を占むる漢民族は、依然として支那民族社會の一部分を構成せるものと言はざるを得ない。されば支那四億の民心を失ふことは、やがては滿洲三千萬の民心を離反せしめるものであることを思はねばならぬ。この見地からしたならばわが國が對滿政策を立つるに當つては、徒らに滿洲國を植民地化せしめんとするものであるとの觀念を東亞民族に抱かしむることは決して得策ではない。あくまでも滿洲國はこれを獨立國として王土樂園たらしむることに努力し、滿洲國の開發を契機として日支間を接近せしむるの策を採ることが必要であつて、これがためには日本の對滿經濟政策も、日滿支經濟ブロックの結成を目標として進むことが必要である。

第十章 支那より觀たる日支經濟關係

第一節 支那國民の無自覺

從來我國の支那に對する態度は、固より時として徹底を缺くの憾みはあつたが、大體に於て、日支兩國はあくまでも共存共榮の境地に在るものである事を基調とし來つた。即ち、兩國は全くその存立の根本を同じくするもので、支那の衰頹は、やがて我國の存立並に發展に多大の危險と障礙とを與ふるものであると同時に、我國が東西の勢力に拮抗するに足る國力を有するが爲めにこそ、支那の保全は期し得られるので、もし一朝、我國にして國勢振はざるに至らんか、支那の運命や實に知るべきである。かくの如く、兩國は俱に國家存立の基礎に於て全く一致せるのみならず、殊に兩國の經濟關係に至つては、全く共通の地位に存立し、我國が製品の販路として、將た原料食料の供給地として、支那市場を失ふことは、やがて我國商工業に大なる影響を與へるものであると同時に、支那も亦たその天產品の供給並に日用品の需要に於て、我國の力に俟たないで

は、到底その國民經濟の發展を期することは出來ない——といふのが我國に於ける日支關係に對する一般見解であり、且つ對支方策の根本主眼であつた。然るに支那に於ける近年の排日運動は、極めて執拗であると同時に、事毎に白熱化する有様であつて、絶えず支那は叙上の兩國の關係を裏切るの舉措に出で、これでは、いつ果して兩國共存共榮の實を擧げ得るや、寔に覺束なき狀勢である。

蓋しこれは畢竟、一面に於て、過去に於ける我國の對支態度が歐米に追從した帝國主義的外交と誤解され易き嫌ひがあつた爲め、その結果、やゝもすれば、支那の疑惑を招致するに至つた事にも基因するが、根本に於ては、支那が自らの積弱を忘れ、事大思想から脱却し得ざるところに大なる不合理があり、溝渠が設けらるゝのである。一般支那國民の思想よりせば、日支の地理的、歴史的且つ人種的關係の如きは、全く偶然的事相であつて、何等必然的なる約束ではない。今日の如く支那が或る程度まで國際的地位を保つ以上は、敢て必しも日本とのみ提携せなくてはならぬ必要は毫も存在しない。利益の爲ならば、何れの國と握手するも妨げない——といふのが、偽らざる彼等の心理である。我國にとりてこそ、製品の販路として支那市場を失ふは、やがて我國

商工業にとり相當重大なる損失であり、支那より原料品食料品の供給を絶たるゝは、我が國民生活の上の一打撃たるを失はないが、支那にとりては兩國の經濟關係がさまで緊密なる状態にあるものとは、一般の支那國民はもとより認識してゐない。否な、寧ろ日本商品の侵入は、支那に將さに發達せんとしつゝある製造工業を壓迫するものであるとして、輓近旺んに日貨排斥を自國工業保護といふ名目上の目的に利用せるのみならず、國內に於ける原料天産品の供給を豊富ならしむるは、やがて産業の發達を助長する所以であるとして、やゝもすれば、その藏する經濟資源の開放すらも之を拒まんとするの氣配がある。殊に從來支那人は、我國が領域内に開發すべき資源を藏すること少なく、從て工業原料並に食料品に乏しく、而かも加ふるに、人口は年々八九十萬を増しつゝある爲め、支那に向つて領土を擴張せんとするの侵略的野心を有するものと、深く誤認せるやの觀がある。近年兩國の關係が甚しく疎隔するに至つたに従ひ、やゝもすれば、支那の國民の間に我國に對する經濟斷交の絶叫せらるゝのも、要するに、彼等の間には、その天然資源の大なるを恃み、これを獨占することによつて自國の強大を圖らんとするの考が強いと共に、我國に對しては、日本は資源に乏しき一小島國であつて、その生存に必要とする原料も食料も支那に仰が

ざるを得ないと同時に、その工業製品も支那に販路を得なくては、成立するを得ない地位に立つてゐるので、これ日本人が常に日支親善を口にする所以であるから、支那が特に決心して繼續的に經濟斷交を敢行せば、日本は忽ちその生存を危うせらるゝに至るに相違ないとの思想が抱懷せられてゐるが爲めに外ならぬ。

一體、支那の一般國民をして叙上の如く我國に對して執拗なる反感を抱かしむるに至つたその罪の一半は、上にも述べた如く、過去に於ける我國の支那に對する態度にも原因するが、元來支那の如く自ら内に足つて外に待つ必要なく、建國以來久しく自給經濟を保持し得たに加へ、從來外に對して消極主義を採り來つた國に於ては、今更、我國との物資交易に重大なる意義を見出すことの出来ないのは、一面から觀て、無理からぬことたるを失はぬが、併しその根本は、支那が未だ全く自國の經濟的地位を自覺せぬからに外ならぬ。凡そ兩國の經濟關係が、いかに我國にとりて重大であつても、支那にとつて必ずしも然らざるに於ては、兩者の關係を改善せしむることは決して容易でない。從て近年の如き支那の排日行動は、却て支那を自覺に導く階梯となり、日支共存共榮の眞諦を理解せしむる動機となるものであると觀られないことはない。もしこれに由

つて、漸次支那は自國のいかに積弱なるか、彼等の矜とせる悠々四千載に亘る炳乎たる文化も、今となつては、單に過去の歴史として光彩を残すのみなるを痛切に覺り、日支關係のいかに重大なる意義を有するかを感得するの機會に逢着するを得ば、兩國の幸ひこれに如くはなく、兩國關係の改善は、一は支那國民の事大思想より脱却することに俟たざるを得ないのである。

第二節 保護政策の謬想

輓近支那に工業熱が熾烈となり、國産保護の欲求が熱烈となつたに乘じて、一面、我國の支那輸出品に對する抵制を以て、その目的を達成せしむるの手段に利用すると共に、他面、保護關稅の設定に銳意努力するに至つた。勿論、支那の如き經濟上の後進國が工業を振興せしむる爲めには、關稅政策はその最も捷徑とするところたるを失はぬが、併しながら、日貨排斥はこれやがて玉石俱に碎くの結果に陥るものであると共に、一體、支那の如き國情の下に於て、以上の如き急激なる工業保護政策を採ることは、却てその急務とせる天然資源の開發を妨げ、その國民經濟の健全なる發展を阻礙することとなるの惧がある。凡そ支那の自然的若くは人爲的條件に適應せる

事業は、日支の國交を犠牲に供するが如き非常手段に訴へなくとも、また格段急激なる保護方法を講ぜなくとも、漸次發達するに至るべきは自然の勢である。即ち多大の資本を固定する必要なく、且つ特種の技術を要する事なく、生産が主として多く普通労働に俟つところの低級生産業は、今後益々支那に勃興し、この種の外國輸入品を漸次驅逐するに至るは、現在の生産收益の比較よりしても、當然の歸趨たるを免れない。從て殊更格段の保護政策を施さなくとも、支那に興り得べき事業は、自づと漸次發達するに相違ないのであるが、而かも急激なる人爲的保護の結果は、却て不自然なる事業の成立を促し、生産要素を適所より不適所に趨はしむることとなるの危険が少くない。元來支那國民の如き、射倖心に強く、且つ現代式工業に對する理解力に乏しく、而かも新式事業經營の修練を有しないかゝる國に於て、急激にして一般的なる保護方法を講ずるときは、勢ひ必ずや不健全なる事業の濫興を促すこととなり、その結果、却て經濟界の秩序を紊し、その進歩發達を阻礙することとなるは疑なきところである。

凡そ工業保護の最も顯著なる場合は、農業國がその經濟を商工業化せんとするに當つて、先進國の強烈なる競争に對し、國內の幼稚なる工業を保有せんとする場合であるが、元來支那の工業

の振はない所以は、必ずしも外國品の競争が激烈なる爲めではなく、寧ろ主として支那の經濟組織並に國民性の上に、幾多の缺陷が潜在せるが爲めに外ならぬ。それに一體、支那の如き經濟のなほ頗る幼稚であつて、未だ民度の著しく低く、人民の多數が農業に従事し、從てその氣風の概して保守退嬰的なるを免れない國に於ては、たとひ外國品の輸入を防遏しても、直ちに國內工業の發達を促すことは至難たるを免れないのみならず、或は却て外國の競争といふ刺戟を失ふに於ては、益々國民を保守的、消極的ならしめ、事物の改良進歩を阻止することとなる懼れがある。もとより支那は廣大なる天然資源を抱有し、殊にその農業の如きは無限に發達するの可能性を有してゐるが、政府の施政宜しきを得ず、國民の經濟力發達しない爲め、今なほその資源の大部分は開發せらるゝに至らず、而かも他方その人口が著しく増殖するに至つた爲め、今や到底支那は往時の如く經濟上の自給を維持することが出来ないのみならず、さらでだに、經濟が極めて幼稚であつて生産が増加しない爲め、國民の大多數が生活の壓迫を受け、社會が無數の細民に惱まされてゐる有様である。元來支那の如くに、數千年來極端なる農本主義を固執し、純然たる農業經濟を以て立國の基本となし來つた農業國に在つては、今なほ國民の主要部分が農業に從來してゐ

る爲め、勢ひ國民一致の氣風が甚しく保守退嬰的となり、その結果、自づから事物の改良進歩が行はれ難く、企業心が萎縮して振はないと共に、勢ひ資本の蓄積及運用も旺んたるを得ないといふ缺陷を生ずることとなるを免れない。從てその結果、他方施政の宜しきを得ないのと相俟つて、益々商工業の發達を妨ぐるの弊に陥り易く、支那が世界に比なき偉大なる持續的文化と無限の天然資源とを保有しながら、今なほ依然として經濟の幼稚なるも實にこれが爲めである。社會がかゝる固定的なる状態を呈するに於ては、保護政策の効果を多く期待することが出来ないのみならず、却てその爲めに、一般物價を騰貴せしめ、國民經濟を壓迫することとなるの弊がある。現に、支那は幾多の原料資源を有してゐるに係らず、綿製品を首め、多くの國民生活上必需の工業品を我國より輸入して居り、その石炭埋藏量の如きは、米國以上に巨額のものと思像せらるるに係らず、今日なほ我國より之を輸入して工業交通等を維持するの必要に迫られて居り、砂糖・海産物其他の食糧品すら我國よりの供給に依つて漸く需要を充たしつゝあるの有様である。從て過去數度の排貨運動の際に於ても、支那の缺乏を感ずること甚しき貨物に付いては、我國の生産品が外觀を變じ、又は取引の徑路を變じて供給せられたものが頗る多きを占むる有様であつ

たが、かくの如き無意味なる外觀の變化と取引徑路の變化との爲めに要する多大の費用は、結局、支那の消費者が自から高價を支拂ふ事に由つてこれを負擔することゝなるに過ぎないのである。一體、支那輸入品の二割以上を占むる我國よりの輸出品は、歐米の輸出品と異なつて概ね支那大部分の國民に需用せらるゝ日用必需品であるから、徒らにこれを排斥することは、結局、多數國民の生活を脅かすことゝなり、政治的及社會的狀態に缺陷の甚しき支那に於て、更に新に重大なる社會的弊害を發生せしむるに至る危険あるものといはざるを得ない。されば、日貨抵制は支那にとつては、寧ろ一種の自殺的暴擧といふべく、またその關稅政策にしても、飽く迄收入主義を主眼とすべきであつて、徒らに高度の保護關稅を設定せんとするは、却つて國民經濟の基礎を危うするものといふべきである。現にこゝ數年來の支那經濟狀態は明らかに之を實證してゐる。

第三節 資源開發の急務と日本

わが國が進んで支那の經濟資源を開發せんとするに對して、從來支那の最も危惧せるは、上に

も敘べた如く、わが國を以て侵略主義の國と爲すの點である。勿論、わが國は領域内に藏する資源に乏しく、人口は年々限りなく増加しつゝあるから、國の存立上、工業原料や食糧品を是非とも國外、殊に隣邦の支那より仰がねばならぬ。しかし、これは人類の共存といふ世界の人道上より觀て、わが國の權利といつてよい。支那の如き無限の富源を秘藏して、自ら封じて居る國に對しては、わが國の如き土地狭く人口多く、而かも文化の進歩の著しい國が、支那の國土を開發し、その文化を普及するといふことは、世界人類の共存といふ大局より觀て、正義であり人道的であるといつてよい。併しながら、その爲めに何等支那の領土を侵略するの必要はないので、支那は單にその資源を開放すれば足るのみであり、而かもその結果たるや、支那の富を殖やし國運の發展を促すことゝなるので、偶々支那がかゝる隣邦を有するといふことは、むしろ支那の爲に大なる幸福とせねばならぬ。蓋し、支那が有する自然の富は、實に無限といふに足るが、これを開發して以て國運の發展に資することは、支那の自力を以てして殆ど不可能なることは、過去の永き歴史の隙かに實證するところであつて、從てその開發は何れにしても外力に頼らざるを得ないことは疑なきところである。然るに米國の如きは、支那に劣らない廣大なる天然資源を抱有

し、主要工業原料及食料品の生産の如きは、全世界の數割を占有せるを以て、全然支那の供給に俟つの必要なく、歐洲各國とても亦、各その廣汎なる領域の開発に銳意しつゝあるから、支那の物資を多く需むる必要を認めない。たゞこれを需要して自國の維持に必要とせるものは、獨りわが國を數ふるのみといつてよい。從て支那の開発は一に我國の力に俟つの外なきものといはざるを得ない。

一體、支那の如き國が、その資源に對して鎖國政策を採るは、全く一種の消極的なる帝國主義的政策であり、人類共存の天則に反するものであるのみならず、支那自身にとつても、その國土の開発は實に刻下の急務たる状態にあるものである。蓋し、從來支那の統一を妨げてゐる障碍の一は、支那の特産物ともいふべき無職の遊民や無籍の流民を首めとして、土匪・群盜・土棍・梟徒の輩が殆んど無數に散在せることである。これが爲めに、絶えず國內の安寧が脅かされるのみならず、彼等を糾合して野心家が互に權勢を争ふに至り、常に和平統一の一大禍根となつてゐるのである。それに、政治上少數の野心家が常に四億の民生を弄びつゝあるのも、畢竟、經濟が幼稚であつて、一般民衆が無力であるが爲めに外ならぬ。近年の支那の如く、上には識者階級が多

く政治に衣食し、輿論の監督を受くることなくして政争に没頭し、而かも多數の國民は、國民生活を政治より防守せんとする鞏固なる社會組織を建設して、政治を忌避し、國家組織の完整を思念せず、加ふるに、下には生活に窮せる無數の貧民散在して、絶えず國內の安寧を脅かしてゐる状態では、到底社會の秩序を維持し國內の統一を圖るを得ないのは當然の歸結である。これといふのも、畢竟、一面に於て、その有する資源が死藏せられて開發利用せられず、從て生産の發達増進を見ることが出来ないからに外ならぬ。されば、先づ國土の開發を圖り經濟の振興を策することが、支那の爲すべき根本的の急務といふべきである。

而して凡そ支那の經濟が、今尙、純然たる農本性的性質を有し、廣大なる土地と、これが開發に適當なる低級生産能力のある無數の勞働者とを有する以上は、その經濟を振興するの根本方針は、やはり農業とか鑛山業とかいふ原始産業の發達を圖ることではなくてはならぬ。即ち少數の産業を保護するよりも、その豊富なる天然資源の開發に務むることが、國民經濟を發達せしむる根本策たると同時に、また最も捷徑とするところである。蓋し、その秘藏せらるゝ經濟資源が開發せらるゝことになれば、勢ひ生産品の價格が低廉となり、延いて國內の工業も至大の利益を享く

ることになるのみならず、他方、これに由つて支那國民全體の富の程度は増進し、從て資本の蓄積及その運用も旺んとなり、勢ひその供給力も亦増大することとなるから、こゝに初めて支那産業の原動力も培養せらるゝこととなり、かくして漸次工業の保護を爲すに於ては、上に敍べたる大なる弊害を見ることなくして、その効果を擧ぐることが出来るものといはねばならぬ。それに、支那の人口の大部分が農民であると同時に、その最も貧困なる階級も農民である。極貧の農民が田舎に於て生存發展の餘地を見出さない爲めに、或は遊民となり土匪となり、或は都會に出て、不安なる苦力の生活を営むのである。故に、もし農民の利益を保護して、これに向上發展の機會を得せしむるときは、今日の如き多數の遊民を四方に送り出すの必要も起らず、軍閥の傭兵となるものも大に減少するのである。而してまた、通例未開の富源の存在する土地は、阿弗利加にしても濠洲にしても、概して人口稀薄なるが爲め、その開發に必要とする勞働の供給に困難を感ずるのみならず、その生産物は全部これを遠隔の地方に輸送するの必要があるのであるが、支那に在つては、富源の開發に必要とする粗大の勞働力が無限に存在するのみならず、これに依つて生産したるものゝ少なからぬ部分を、直ちに自國市場に於て消化することが出来、また近くに

日本の市場を有するといふ極めて有利なる地位に立つてゐるのである。從てこれ等の點より觀ても、先づ原始産業の發達を圖ることが最も有利であるとせねばならぬ。

而して原始産業の發達を圖らんが爲には、支那の如き保守消極的なる經濟の行はれてゐる國に在つては、その生産の増進を妨げてゐる根本的の障礙を容易に除去し得ないまでも、先づ生産品に有利なる販路を與へて、その生産を外部より刺戟するの策をとることが必要である。然るに支那はその國民生活の安定を計らんとする趣旨から、從來米及鹽の輸出を恒久的に禁止せるのみならず、なほやゝもすれば、原料天産品の輸出を阻止して、以て國內工業の發達を促進せしめんとする策をすらはんとするの傾向がある。而してこれ等の禁輸策は、日支兩國民の生活上に共通の點が多いだけ、主として我國に對する防衛策たる場合が多きを占むるのである。勿論、支那の如き經濟組織の極めて不統一であつて、對内政策の實行に幾多の不便を有する國に在つては、機に臨んで一時的禁輸策を採るは、時によつては、已むを得ざる機宜の處置たるを失はぬが、繼續的に、却てその進歩發達を阻止するの愚策たるを免れない。殊に原料天産品の輸出を阻止して國內

に於ける供給を豊かならしめ、これに依つて工業の勃興に資せんとするが如きに至つては、全く舊式なる保護思想に基くものであつて、かゝる姑息なる政策に依つて決して工業の發達を期し得るものでないのみならず、その結果、却て原料生産業を衰頽に導くこととなり、支那の如き農本國に於ては、全く經濟の發達に逆行する一大愚策といふべきである。一體、支那は歐洲に比敵するに足る大陸であると共に、廣大なる平地國であつて、而かも各地方間の氣候風土の差が著しいから、今日の如く各地一様にその地方民の生活に必要なとする穀物の生産を主とせず、更に輸出の目的を以て、各地に最も適當せる生産を行ふに於ては、米國にも劣らざる世界有数の一大生産國となり得るのである。而してこれが爲めには、たゞに生産品に有利なる販路を與ふるのみならず、更に進んで生産品の改善をも併せ期することが必要である。凡そ支那に産出せらるゝ物資は頗る多種多様であるが、その生産の多くが今尙殆ど原始的の域を脱せない爲め、やゝもすれば、概して野生的性質を帯ぶるを免れない。棉花の如き、その産額十億斤以上に上ると稱せらるゝも、縱かに中太絲を紡出するに適し、羊毛の如きにしても、少なくとも一億數千萬斤の産額あるも、毛質荒くして、そのまゝでは、以て軍用毛布若くは粗質の洋服地以外の製造に供するを得ない。

い。これが爲めに、我國の如き、年々十億斤以上の棉花と一億數千萬斤の羊毛を需用しながら、遠く印度其他より供給を仰ぎつゝある状態である。而してこれが改良は、技術の幼稚なると、政府財政の窮乏せる點よりして、先進國の助力に俟たざるを得ないが、而も此種物資を自國の維持に必要なとするが如き痛切なる需要を感じて居る我國の助力に依て、初めて有利に改良の目的が達成せらるるのである。米穀の如きも、支那全國の産額は二億五千萬石に上ると推算せられてゐるけれども、近年は供給不足のため、年々少なからぬシヤム米西貢米を輸入してゐるが、これとても、多少その生産を集約的ならしむるに於ては、我國の實例に照して五割以上の増收は決して大なる難事でない。併し、これが爲めには、過去數十年間に亘り、科學と資本の力を利用して、集約農法に必死の努力を費し、尊い經驗を重ね來つた我國の指導と援助とに俟たねばならぬのである。

之を要するに、支那としては、その國民の少なくとも八割が農業に従事してゐる現状よりして、先づ極力その生産の増進を策することが根本の國策であつて、しからざる限りは、いつ迄も民衆をして今日の貧弱なる生活より離脱せしむることが出來ず、從てその間に頻々として飢餓が起

り、またこれに伴うて發生する土匪や馬賊の禍根を絶滅することが出來ず、延いては社會の秩序をも維持することも出來ない。現在支那の農民はその根本に於て、いかに資本、労働を投じて生産の増加を圖つても、十分有利に之を販賣することが出來ないから、農業上の改良は勿論、産額の増加も行はれないのである。その結果、彼等は平時に在つても、漸く生計を支持するに足るだけの収入を得るに止まり、勿論、平時の餘裕を以て凶年に備ふることも出來ず、多少不作となれば、忽ち飢餓に迫らるゝこととなるのである。従て支那としては、我國と提携して、生産の増進改良に努むる事が、最も賢明なる策であるのみならず、むしろその急務とするところである。殊に支那の鑛業資源に至つては、現行鑛業條例では外人の企業投資を排斥せる傾もあるも、企業上の危険率が大なると共に、巨額の資本を必要とするから、一層外國の助力に頼らねば、これが開發を期することは出來ない。従てその最も豊富なる鐵石炭の如きは、寧ろ進んで我國との協力によつて開發するを支那の爲めに得策とする。

第四節 商工業の發展と日本

支那は古來極端なる重農政治を採用し來つた國であつて、今日といへども、未だもとより農業國たるの域を脱し得ないに係らず、過去の政治が宜しきを得なかつた爲め、その農業なるものは、依然として原始的状態にあるから、先づ支那の國富及民衆の福祉を増進するの途は、やはり原始産業の發達を圖ることにあるは上に敍べた如くであるが、さればとて、支那がいつ迄も農業立國主義を固執し、工業品は専ら之を先進國に仰ぎ、食料品原料品を外國に供給して國民の生活を立つるに於ては、その文化を進め國運の發展を期することは出來ないから、他方、もとより漸次商工業の發達をも圖るの必要あるは疑を容れない。蓋し現時支那の下層階級が極度の生活上不安の地位に陥れるは、前に敍べた如くであるが、近年支那の智識階級の間に於ても、漸次生活の不安を感じる者が増加するに至つた。即ち近年遽に支那に教育熱が旺んとなり、文明的教育を受ける青年が大に増加するに至つたが、國內の商工業が發達せない爲め、これ等有爲の青年は經濟上活躍するに足る適宜の地位を見出すことが出來ないで、その結果、或は徒らに政治に奔走して、往々にして社會の寄生蟲たるが如き地位に陥り、やゝもすれば、國家の危険分子たらんとするの傾向を示すに至つた。近來支那に政争の激烈なるも、また社會運動その他の民衆運動の旺ん

なるも、一はこゝに原因するものである。また近年の支那の政界は勿論、識者社會の狀況を見て、甚しき道德的頹廢を示してゐるが、これとても、畢竟、主として彼等が極度の生存競争をなさねばならぬ境遇に陥つてゐるが爲めに外ならぬ。本來の支那民族の素質よりせば、世界の諸優等民族に比して、決して劣等のものでないことは、その特有の文化が非常なる高度に進んだ歴史に照して疑なきところであるが、併し社會が今日の如き固定的の狀態を呈するに於ては、少數の先覺者が奮起して、一大改造を行はんとしても容易に成功し得べきものでない。従て支那は、勿論、我國の如くその經濟を可及的商工業化せしむる必要は全然ないが、一面、原始産業の開發に銳意すると共に、他面、商工業の發達をも圖ることが必要である。

而してこれが爲めには、先づその一部の産業に革命を行ふことが必要であるが、支那に於て産業革命を遂行するには、そこに幾多の缺陷が存在するので、就中、資本に缺乏し、支那人の個性に伴ふ缺陷の如きは、その最も大なる障碍たるを免れない。支那に資本の缺乏せることに對しては、多少異論のあるところであるが、併しながら支那の如き農業を以て建國以來の國本と爲し來つた國に於ては、勢ひ資本の蓄積及運用の盛んなるを得ないことは當然であると共に、殊にその

外國貿易の稍々發達するに至つて以來、連年入超を持続せる有様であつて、而かも貿易外の國際貸借上に於ても、必ずしも敍上の入超を決済して餘りあるの狀態でなく、且つ國內には金銀の產出に乏しいから、到底國內に資本の蓄積があり得べき理がない。かくの如く支那に資本の缺乏せる以上は、零細なる資金を廣く集めることの出来る株式組織の會社事業が最も適當してゐるのであるけれども、元來株式組織は、負債に對する責任が有限である爲め、債務に對して無限に責任を負ふべき支那固有の慣習に反するのみならず、何等法制上の取締監督なく、殊に民族性の著しく公共心に缺乏せるより、その爲めに親族故舊以外の多數の結合にあつては、多く無規律亂雜に流れ、何人も進んで事業の爲めに盡すの誠意を有するものなく、いつしか先天的の利己に趨り、事業の利害は全くこれを顧慮せざるに至るを常とするのである。従て株式組織の企業は、支那に在つては、未だ近世的企業の經營に對する訓練を経ないのと相俟つて、成功を期し難く、從來支那に於ける株式組織事業の多く失敗に歸せるもこれが爲である。さればとて、かゝる事業は國民の根本的利害の上に於て一致し得る者の協力に依らざれば、その目的を達成することは出来ない。即ち文化の根源を同じくし、物質生活の根本に於て一致し、精神的に共鳴することの出来る

我國の助力に頼らなくては、到底成功を期することは出来ない。殊に日支兩國の需要が共通的であつて、而かも東亞固有の産業の如きに至つては、兩國の協戮に俟たない以上は、到底これを現代化することは出来ない。生絲及茶の如き、兩國が同種商品を提げて國際市場に競争しつゝあるものゝ如きも、本來支那が主産地であつて、今日に於ても生産上に於ては、到底我國の如きその敵でないに係らず、世界市場に於て常に本邦品の爲めに壓迫せられてゐるが、支那がこの種産業の回復發達を圖らんとするには、たゞに我國の資本や技術の力を藉るのみならず、進んで我國の商工業をも利用し、畢竟、兩者を共通的基础の上に立たしむるの策を講ずることが必要である。かくしてこそ、初めて兩者共に國際市場に不拔の確乎たる商權を扶植する事が出来るのである。支那がもし飽く迄も我國に拮抗せんとするならば、我國も已むを得ず自衛上、從來の如く支那産品を壓倒するの策を採らざるを得ない。

凡そ世界列國の生存競争たるや、畢竟、各自の種族とその文化とを維持發達せしめんが爲めに外ならないから、従て、たとひ、種族と文化とを異にする國民間に親善關係の成立することがあつても、これ全く巧利的機宜の現象に止まるもので、眞の和衷協同たるや、同文同種であつて、

經濟上の利害の全く共通せる國民間でなくては成立すべきものでない。然るに、やゝもすれば、日支間親善關係の疎却せられんとするが如きことの起るは、これもとより幾多の歴史上の事由にも原因するとはいへ、畢竟、兩國が全く生存上共通の基礎の上に立てる根本關係が、彼我國民間に徹底的に理解せられず、その間意思の疎隔せるものが存在するが爲めに外ならぬ。従て兩者の提携を策せんが爲めには、先づ敘上の兩國關係の眞諦を廣く兩國民間に理解せしむることが根本の要件である。

第十一章 支那の排日運動と對支政策の基調

第一節 排日運動の由來

我國の對外政策の重大なる部面を占めるものは、實に對支政策であることは、固より論を俟たない。而るに支那の政局が變轉極まりなき爲め、一定の方針を以てこれに處することの頗る困難なるは、言を須むざるところであるが、併しその間、日支兩國の必然的關係と相互の國情とを基調として立てらる可き一貫した根本策なるものは當然なくてはならぬ。その根本的の國策さへ確立して居れば、永遠の生命を有する國家として採るべき方針は、隨時隨處に生れ出づべきである。近年支那に於ける排日運動の如きにしても、その白熱化する度毎に、重大事件の勃發せしが如くに傳へられて居るが、それとても我國の支那に對する根本政策さへ確立して居れば、何等意に介するに足りない筈である。

支那に於ける日貨排斥運動は十數年以前から發生して居るのであつて、曾ては自國の産業保護を目標とした運動であつた時代もある。もと支那は關稅に於て自己の自由之を左右することが出来なかつた。即ち協定稅率主義に依り、各國との間に條約に依つて關稅が拘束されて居つた爲め、自國の事情に依つて自由に輸入關稅を引上げることが出来ない立場に立つて居つた關係上、低廉なる日本商品が支那に進入しては、到底幼稚なる支那の産業を育成することが出来ない。従つて自衛上已むを得ず日本の商品を排斥しなくてはならないと云ふ斯かる目標を掲げて日貨排斥を行つた時代もあるのである。近年に至つては、支那が關稅自主權を回收した爲めに自由に自國の輸入關稅を引上げることが出来るやうになつたのであるが、いまや支那の排日運動が慢性的になつた關係上、斯かる目標を掲げることなしに、殆んど年中行事の如くに此の運動が繼續されるに至つたのである。殊に滿洲事變以後に於ては、さなきだに歐洲大戰が世界の思想界に一大衝動を與へて、爾來此の世界思潮の變動が支那にも波及したため、或は各種の利權回收、若くは不平等條約撤廢と云ふが如き所謂國權恢復運動に狂奔し來たつた關係上、滿洲事變以來に於ては稍々感情的に此の運動が一層慢性化すると云ふ狀勢に立至つたものである。

勿論、近年支那に頻出する社會的若く政治的性質を帯びた排外運動は、各種の事情が綜合して

その原因を爲せるものであつて、決して單純なる事由に基くものではないが、その根柢には矢張り一貫した根源が存して居るものと言つてよい。即ちその根源たるや、古くより自國が獨り文化の中心であつて、他國は所謂東夷、西戎、南蠻、北狄であると見做し來つた一種の排他的思想に萌芽由來せるものに外ならぬ。事實、支那の悠々四千載の永い經歷を保ち來つた炳乎たるその文化に至つては、寔に世界に誇るに足るべきものがある。凡そ同一民族であつて、四千載の永い歴史と文化とを持續し來つた民族は、殆ど世界を通じて類例を見ないところである。持久力のある文明は支那の誇る可き長所であつて、たしかに支那民族が他國民の前に矜恃するに足る所である。かくして支那民族は、古來彼等の生息するところが天下の中央で、而かも燦然たる文化の中心であつて、漸次四邊の諸邦が文化の力に依つて征服せらるゝといふ所謂中夏思想を抱懐し來つたと同時に、事實、過去に於いて彼等の理想を四邊の異民族に對して實現せしむるを得たといふことが、一層彼等の自尊心を強大ならしめたものである。全く支那民族は初めから武力を用ひて他民族を征服する方針を採らないで、文化の力を以て之を同化して發展の進路を開くといふ文化的同化主義を採つて進んで來たものであつて、その彼等の有する偉大なる同化力に至つてはこれを是

認せざるを得ない。

如上の自尊心が即ち事に觸れて排外運動を惹き起す根基となるものであるが、殊に日清戦争以來列國の帝國主義的外交が支那の上に加へられ、宛も被征服民族の如くに事毎に甚しき壓迫を加へらるゝに至つた爲め、こゝに支那の上下に一種の反抗心が自づと醸成せらるゝに至つたもので、就中我國に對しては、輓近我が國運が旭日の勢ひを以て發展し、一躍世界の強國に列したのみならず、特に支那に於ける我國の地位は益々優越となり、世界の列強もこれを認定せざるを得ないことに成つたに對し、他面、支那は之に反して漸次崩落衰退の兆を呈し來つたと相俟つて、こゝに一種の已み難き日本に對する猜疑心が支那の國民の間に自づから抱懷せらるゝに至つたものである。それに過去に於けるわが國民は、常に諸外國に對して支那を保全することを以て我國の天職なりと論じ、また絶えず日支親善の必要を高調しながら、我國自身の對支政策は、何といつても歐米に追隨して帝國主義と解せざるを得ないものであつた爲め、漸次支那國民の反感を増大せしむるに至つたところへ、時宛も歐洲大戰後文明世界を振盪しつゝあつた社會思想の激流が支那にも波及するに至つたから、果然こゝに排日運動が熱狂化するに至つたものに外ならぬ。

歐洲大戰以來世界的に人心を動搖せしめた改造問題は、その根柢に於ては、何れも少数者の專制に對して民衆が自由を要求する運動、即ち民衆解放の運動であつたが、各國の進歩の程度に從つてその國に行はるゝ專制の形式に自づから相違があつた。政治上の自由の確立せる歐米先進國に於ける專制は、主として資本主義といへる經濟的のものであり、從つてその必要とする改造は社會的であつた。併し經濟の幼稚なる支那に於ては、未だ資本主義がその經濟を左右するに至らないに反し、政治上の專制は極度に増長し、少數の軍閥や政客が公器を濫用して四億の民生を弄びつゝあるから、その最も急を要する改造は政治的のものである。而るに若しも、我國が首め諸國の對支外交方針が飽く迄も帝國主義を貫くに於ては、支那青年の政治的改造運動が絶望的となり、これが爲め彼等の運動は一躍社會的改造に向ふこととなり、その結果、支那の社會は革命後の露國以上の混亂状態に陥るの危険なしとしない。近年已に不健全なる社會運動が支那に波及せんとして居るのも、一はこれが爲めである。即ち支那の智識階級にして世界文明に接觸するに従ひ、益々自國の境遇の不利益なるを感じ、同時に之より脱出することの非常に難事たるを覺り、從つて之より脱出するが爲めには、如何なる極端なる手段を執ることをも辭しないといふが如き

思想を、近年彼等をして抱かしむるに至つたことに付ては、その罪の一半は今日迄の各國の帝國主義的外交にあるものと謂はねばならぬ。支那の青年の排日を主張して國民の敵愾心を強むる限り、支那の軍備は裁減出來ず、從つて軍閥の打破も困難となり、その專制の下に苦しまねばならぬが、而かも我國が支那に對して帝國主義を採る限り、支那の青年が排日運動を止めることも出來ないといふ窮境に陥らざるを得ない。勿論從來に於ける我國の帝國主義政策は、歐米列強の極東侵略に對抗せんが爲めの自衛策とも見られたが、今後は、世界の諸強國が如何なる對外策を採るを問はず、我國は從來の如き帝國主義と解せらるゝが如き政策を絶対に放抛し、支那もまた我國に對し經濟斷交を行はんとする如き消極的帝國主義と解すべき行動を止め、眞に平和の共同生活を營むと同時に兩國相提携して、東洋の天地に諸強國の帝國主義の侵入し來ることを防止すべく、協力することが必要である。

第二節 對支外交の根本方針

近年の我國の對支外交は、一時は數度の執拗なる熱狂的排日運動に懲りたものか、著しく平和

的となり、動もすれば、時として徒らに支那の要望に迎合せんことに汲々たるやの感なきを得なかつたが、最近はまだ著しく強壓的となるに至つた傾がある。勿論、支那の要望にしても、それが眞に支那國民の意思を表示したものであり、且國民全體の利益となることの確實なるものであつて、而かも我國民生活に大なる危険を及ぼすが如きものでない限りは、進んでこれが達成を助成すべきである。而るに従來支那の國民的要望なるが如くに喧傳せらるゝものゝ多くは、その實、一部知識階級の間の主張に止まつて、必ずしも大多數の國民の意思でないものがあり、或はまた、その事自身がいかに正當なる主張であつても、支那の國情からして、到底それが國民全體の利益に供し得る確實性のないものも少なくないのである。彼の租界撤去問題の如き、その例たるを失はぬ。勿論支那の如く民衆の蒙昧なる爲め有力なる輿論の存在しない國に在つては、動もすれば少數の識者階級によつて國民の指導せらるる場合が少なくないが、その識者階級の主張なるものが、常に必ずしも支那特有の國情に照して公正なるものとのみいふを得ないのである。殊に今日支那の指導階級を以て任じて居る青年の多くは、國內若くは海外に於て、主として歐米式の教育を受けた者であるが爲め、甚しく自國の實情に通曉せず、殆どその固有の文化に對する理解を有

しない關係上、ともすれば、彼等は急進的に歐米模倣の制度をそのまま支那に施行せんことを主張するの傾がある。近年支那に保護貿易論の大に盛となるに至つたのも、勞働運動其他に對する社會主義的思想の遽かに有力となつたのも、すべてこれが爲めである。我國が、新支那を助けて政治的社會的改造を行はしむべきや、又は時勢に反抗して專制的の舊支那を支持すべきやといへば、固より前者を擇ぶべきであるが、さりとて新支那建設者の行動が、必ずしも純眞公正なりといふを得ないから、徒らに彼等の主張に迎合することは、大に慎しまねばならぬ。蓋し彼等の多くは、支那独自の社會狀態を考察せずして、歐米模倣に急であるのみならず、今日の支那に於て上層者も下層者も極度の生存競争を爲さねばならぬ境遇に陥つて居るが爲め、動もすれば彼等の運動に不純性を帯ぶる場合が少なくないからである。従て我國にして、若し新支那を助けて政治的改革を行はしめんとするならば、須らく彼等を指導するの覺悟がなくてはならぬ。

世上往々にして、支那は自らその運命を開拓すべきであつて、我國などの關與すべき限りでない。支那がいかゞなうと、それは支那自身の問題であつて、我はこれを對岸の火災視して差支ない。唯だ火焰が此岸に及ばんとするに當つて、これを消防すれば足るのみである。との議論を

爲す者が少くない。勿論、支那は支那國民をして治めしむべきであつて、我國の力を以て支那を自由にせんとしても、到底出來得べきものでなく、各民族には夫々獨特の歴史と社會とがあるから、その民族に適應した政治を行はしむべきで、他國の積極的干渉は結局有害無益に了るのみである。從來各國が支那の軍閥を援けて國內の統一を圖らんとしたけれども、悉く失敗に歸したのみならず、却て支那の混亂を助長せしむるの結果に陥つたことは、明確なる實證である。従つて支那の内亂に對して干渉政策を弄するが如きことは、絶対に之を避くべきであるが、併しながら、支那の特異の國情と日支間の重大なる關係とに鑑みて、我國たるものは、支那の推移に對して全然無關心たることは出來ない。若し我國が漫然支那の事態を對岸の火災視するに於ては、恐らくいつ迄も日支共存共榮の實を擧ぐる事が出來ないであらう。勿論、我國が支那に求むるところ極めて薄きに於いては、かゝる極端なる消極主義も敢て妨げないが、我國情が、殊に經濟上に於て將來益々支那に求むるところの大なる以上は、寧ろ進んで支那を善導するの舉に出づることが必要である。この見地よりして、我國が支那の輿論を指導するに足る何等の宣傳機關をも有しないことは、大に遺憾とせざるを得ない。それと共に、支那に於ける軍事顧問は、全然有害無益の

ものであるから、之を廢止せしめて、寧ろ政治顧問を推舉すべきである。此の如く我國が支那を指導するの態度に出づるの必要ある以上は、支那の要望にしても、支那の一般國民の利益を基調としたものでない限りは、斷然峻拒すべきである。或はその結果、一時熱狂的排日運動の勃興を見るやも計り難いが、我國の舉措が支那國民全體の眞の利益を思念した結果である以上は、必ずや我が眞意が、遠からず支那の理解を得るに至るに相違ない。唯だ徒らに排日運動を惧れて、支那の要望を認容せんとするが如きは、一大愚策たるを免れない。

元來一般支那人の間には、その天然資源の大なるを恃み、之を獨占することに由つて自國の強大を圖らんとするの考が強いと共に、我國に對する思想を觀るに、日本は經濟資源に乏しき一小島國であつて、その生存に必要な原料も食糧品も支那に仰がざるを得ないと同時に、その製品も支那に販路を得なくては成立するを得ない地位に立つて居る。これ日本人が常に日支親善共存共榮を口にする所以である。故に支那が大に決心して繼續的に經濟的排日を行へば、日本は忽ちに生存を危うせらるゝに至るとの考を抱懷して居る。勿論、吾人は何れの國よりも先づ支那に天然資源を仰ぎ、また我製品の販路をも支那に求むることを希望するのであつて、將來は益々其

の必要を告ぐるに至るに相違ないが、併し現實の支那は、我國の必要とする食物原料を十分に供給するの力もなければ、また我が製品を十分に購買するの力もない。従つて今日支那より經濟斷交を受けても、必ずしも我國國民經濟の基礎を破壊し、國民生活を危殆に陥らしむるが如き惧はない。それよりも却てその結果、支那自身の受くるところの打撃の方が遙かに深甚である。さらだに、産業起らず、貿易振はず現實に國民の大半が生活上の壓迫を受けて居る今日の支那が、經濟上最も關係の緊密なる我國と經濟斷交を行はんか、それこそ、自ら天に向つて唾するものであつて、全く一種の自殺的暴舉たるを失はないことは、近年の事實の明かに實示するところである。支那が自給自足の經濟を保持し得たのは、已に昔のことであつて、人口の著しく増加した現時に在つては、さし當り其望がないと共に、天然資源が豊富であるとはいへ、單に死藏されて居るのみであつて、現人口をすら養ふに足らずして、甚しく人口の過剩に悩んで居る。事情斯の如くであるから、過去數次の日貨排斥運動に際しても、支那の缺乏を感ずること甚しき貨物に付ては、我國の生産品が外觀を變じ、又は取引の徑路を變化して、支那に販賣せらるゝを例とせるが此の如き無意味なる外觀の變化と取引徑路の變化との爲めに要する多大の費用は、すべて支那の

消費者が自から高價を拂ふことに由つて之を負擔することとなるので、全く兒戯に類した行動である。而るに斯る兒戯に類した行動も、支那の社會的缺陷と支那人の無理解との爲めに、屢次繰り返されて居るのであつて、寔に支那のため悲しまざるを得ない。

之を要するに、支那の政治は、一部の軍閥や政客の權勢爭奪の具となり、全然國民の實生活とは沒交渉のものとなり、國民は政治を逃避せる有様であるから、支那の一黨一派と握手するが如きは、全然無意義の政策たるや論を俟たない。従て我國の對支政策の根本は、飽く迄も支那國民全體の利益を基調としなければならぬ。これが我が對支外交の根本原則でなければならぬ。即ち支那全國民の利益の爲めには、多少の我國の利益は之を犠牲に供しても、進んで支那の要望を達成せしむべきである。併しその代りに、支那の要求が表面いかに正當であつても、それが全國民の利益とならぬものならば、敢然これを峻拒し、彼れの謬見を矯すことに努力することが必要である。從來の如き飽く迄支那を強壓するか、然らざれば彼れの意に迎合せんことに努むるかか二途を出でない對支方針では、いつ迄も我國の經濟的發展を伴ふ國策を遂行することは出来ない。我國たるものは、須らく支那を指導するの地位に立たねばならぬ。而して我國は如何なる場合に

も正義の觀念に立脚し、正義に終始し、飽く迄も兩國々民の利益の結合を基調として進むことが必要である。

第三節 支那經濟の開發と對支政策の根基

今日我國の支那に對する當面の關係は、主として經濟問題に立脚して居る。而して兩國の經濟關係は稍複雑なる状態に在るが、畢竟するに、支那が我國にとり原料食糧品の供給地として、將た製品の販路としての重大たる地位に立つて居るものに外ならぬ。然るに支那の對外貿易は、極めて貧弱であつて、人口一人當りの貿易額に至つては、世界最劣等の地位に立つて居るに過ぎない。爲めに充分我國の要求を充たすことが出来ない有様であつて、我國の最も恃頼せる支那の貿易が、かくの如く微々として振はないことは、我國民經濟の發展上一大恨事たるを失はない。併し支那の貿易の發達しない所以は、その輸出貿易が振はず、從て國民の購買力が頗る貧弱なるが爲めであるから、先づその輸出貿易の振興を策することが急務である。元來支那は適切なる方策をさへ講ずれば、今後世界の生産國として發達することの出来る國であるから、可及的天產物

の輸出を有利にして、その生産の發達を刺戟することが必要である。即ち支那の生産の發達を妨げて居る幾多の根本的障礙を除去しないまでも、單に生産物に對して有利なる販路を與へ、以て農民の生産を刺戟するだけでも、その耕作地の廣大なるだけ、少なからざる生産増加を示すことの出来るのは過去に於て實見したところであつて、その實例に乏しくない。然るに支那自身は、前述の如く其傳統的なる自足經濟主義に捉はれて、何等輸出貿易の振興を策せんとするの意圖なく、國民にも亦たその能力なきは、これ亦た過去の事實の示すところであるから、これは一に各國の助力に俟つの外ない。併しながら、米國の如きは、支那に劣らざる天然資源を擁し、主要工業原料及び食糧品の生産の如きは、全世界の數割を占有せる有様であるから、全然支那の供給に俟つの必要なく、歐洲各國に在つてもまた、各其廣汎なる領域の開發に銳意しつゝあるから、支那の物資を多く需むる必要を認めない。唯だこれを需要して、自國の維持發展に必要とせるものは、獨り我國を數ふるのみであるから、從て支那の開發は一に我國の任務といつてよい。

斯く觀じ來らんには、須らく今後の我國の對支貿易政策は、之を轉換して、從來の如く徒らに我國製品の賣込にのみ熱中することを避け、先づ支那の物資の利用を策することに努めねばなら

ぬ。斯くして我國が支那の物資の利用を圖るは、支那を富ましめその購買力を培養する所以であつて、これ聽て我製品の販路を進展せしむる捷徑たるを失はない。即ち我國の生産に對し支那を最大の得意たらしむるが爲めには、先づ支那の生産に對して我國自身が最大の顧客たるべく努力することが必要である。一體、歐洲列國が今日の發展を見るに至つたのは、世界各地の物資を自國經濟の培養に利用するを得たからであつて、支那に藏有せらるる豊富なる物資を、如何にして人類の生活に利用し得べきかを研究することは、實に我國の一大使命であつて、この任務を果すことに依つて、初めて吾人は東洋經濟の支配者たる地位に立つを得るのである。而して物資の利用は、元より可及的これを我國に於て行ひ、我經濟の涵養に資せしむるに如くはないが、支那の物資の利用を圖り、その資源の開發をなすを主眼とする以上は、必ずしも我國に於ける利用のみに捉はれず、支那に於ての利用を有利とするものは、これを支那に於て行ひ、尙進んでは支那の天産品の諸外國に對する輸出をも策し、支那生産品の供給權を占握するの雄圖を目的として進むべきである。而るに支那は、現に各種の輸出品に課税し、穀類の輸出を禁止せるのみならず、尙曾ては我國に對する棉花の輸出に對して、輸出税を重課せんとせし如く、また近來は支那に於け

る外人企業を妨害せんとし動もすれば經濟資源の封鎖を爲さんとせるが、元來支那の如き無限の富源を藏しながら、自ら封じて居る國に對しては、我國の如き土地狭く人口多く而かも文化の進歩の著しい國が、支那の國土を開發し、その文化を普及することは、世界の人類共存といふ大局より觀て正義であり人道であるとせねばならぬと共に、支那が斯の如き鎖國政策を取るは、全く人類共存の天則に反するものであるのみならず、支那自身に取つても一種の自殺的政策たるを失はぬから、此點に對しては特に支那の反省を促すことが必要である。即ち支那の如き廣大なる領土と豊富なる天然資源とを有する國が、之を他國に對して閉鎖し、以て他國の生存を脅かすことは、全く帝國主義の消極的實行と言つてよい。従つてその行動が、各國互に平等の生存權を認め、之を尊重するといふ公正なる國際共同生活の原則に反することは、敢て積極的に他國の領土に對し侵略的行動を採るの不當なるに異ならない。故に我國が積極的帝國主義を放擲する以上は、支那をして此種の消極的帝國主義を放棄せしむることは、當然の要求と謂はねばならぬ。

加之、支那の秩序の紊亂は、支那人の國家思想の薄弱にして公共心の缺乏せるが如き道德上の缺陷にも原因して居るが、今日の支那に於て、上層階級も下層階級も極度の生存競争を爲さねば

ならぬ境遇に陥つて居ることが、寧ろ根本の原因である。今日の如く支那の社會に於て、上は識者階級が一般文明國に於けるが如く、廣汎なる就業の途を見出すことが出来ないで、主として政界に投じ、輿論の監督を受けずして激烈なる政争を行ふと同時に、下には生活に窮せる無数の貧民が存在して居る限りは、動亂の絶ゆべき筈なく、到底社會の秩序を維持するを得ざるは當然の歸結たるを免れない。従て支那の紊亂せる秩序を回復するが爲には先づ何よりその經濟の振興を圖ることではなくてはならぬ。而して支那の經濟が、今尙ほ農本的の性質を有し、廣大なる土地と之が開發に適當なる低級生産能力のある無数の勞働者を有する以上は、その經濟を振興するの根本方針は、矢張り原始産業の發達を圖ることではなくてはならぬ。而してその目的を達成せしむるが爲めには、一面、天産物の輸出を促進せしむるの策を講ずると共に、他面、外人の企業投資を誘引することが必要である。それに又、近年支那は産業保護論が旺であるけれども、本來支那に於ては工業發達の要件が極めて不充分である爲め、保護税に因り民衆の生活を甚だしく苦しむる割合に、工業發達の利益を生ずることが頗る少ないから、輸入税の増徴は却て經濟の進歩に逆行するものたるを免れない。事情がかくの如くであるから、近來の如く支那が不當の輸入税を設

定し、若くは外人の企業を妨害せんとするが如き態度は、固より通商條約の精神を蹂躪するものであり、且外國就中我國の利益に至大の影響を及ぼすものであるのみならず、支那自身にとつても結局益々國民生活を壓迫することになるものであるから、斷乎としてこれを阻止するの舉に出づべきである。勿論、我國の支那に於ける企業投資に對しては、之に反對する論者があるが、貨物の生産に於て我國が支那と最も多く競争關係の地位にある以上、我國經濟の現状よりして、支那に於ける企業は、我産業の基礎を涵養する要件たるものである。

これを要するに、我國の對支政策の根本的基調は、支那全國民の利益を目標とした支那の經濟開發に在るものといはねばならぬ。

第十一章 日支貿易の展望

第一節 我對外貿易上に於ける支那の地位

昨年來頻りに日支關係好轉の報が傳へられたが、これがもし完全に實現された際には單に日支兩國の爲めのみならず、東亞、延いては世界の經濟にも安定と正常とを齎す上に於て相當なる影響を與へることとなるに相違なからう。多年、傳統的、組織的排日に終始して來た支那のこの轉向が果して何に起因するかは茲に論じないが、兎に角支那朝野有力者の來訪があり、親善工作にも具體性が見えて來たので、昨年に入り我對支貿易も亦多年の暗雲を脱して幾分かの明るさを加へて來た。然し、一昨年迄の我對支貿易は實に慘澹たる情勢を展開して來たものであつて、以下説述する如く年々衰退を續け、我國貿易總額に於て英印の半ば以下に下り、蘭印に比しても總額に於て大差なきのみならず、輸出に於てはこれにさへ劣る有様だつたのである。今これを表示すれば次の如くである。(東京商工會議所、重要經濟統計月報に據る、單位千圓)

年次	米		國		支		合計
	輸出	輸入	合計	輸出	輸入		
一九二四	七四、九二五	六七〇、九九三	一、四一五、九一八	三三八、三九八	三三七、五四三	五八五、〇九一	
一九二九	九一四、一〇一	六五四、〇五五	一、五六八、一五六	三四六、六五三	二〇九、九七五	五五六、六二七	
一九三〇	五〇六、一三三	四四二、八八一	九四八、九三三	三二〇、八三五	一六一、六六六	四三二、四九一	
一九三一	四二五、三三〇	三四二、二八九	七六七、六一九	一四三、八七六	一〇三、七四九	二四七、六二五	
一九三二	四四五、一四七	五〇九、八七三	九五五、〇二〇	一二九、四八	七七、一七五	三〇六、六五五	
一九三三	四九二、三七七	六〇〇、七八八	一、一三三、〇六五	一〇八、二五三	一一三、三五七	三二一、六一〇	
一九三四	三九八、九八八	七六九、二五九	一、一六八、三三七	一二七、〇六二	一一九、五六一	三三六、六二四	
年次	英		印		蘭		合計
	輸出	輸入	合計	輸出	輸入		
一九二四	一三五、三七三	三三七、七九二	五三三、一六四	五九、三三二	九二、四〇〇	一五二、七三二	
一九二九	一九八、〇五六	二八八、二一〇	四八六、一七六	八七、二二五	七七、三四五	一六四、四七〇	

一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三	一九三四
二二九、二六二	二一〇、三六七	一九二、四九二	二〇五、一五四	二三八、三〇〇
一八〇、四〇五	一三五、一六五	一一六、八六五	二〇四、七五七	二八九、六七一
三〇九、六六七	二四三、五三三	三〇八、三五六	四〇九、八九二	五二七、八九一
六六、〇四七	六三、四五〇	一〇〇、一五一	一五七、四八七	一五八、四五〇
五九、九六三	四六、〇〇〇	四〇、四〇九	五五、七〇九	六三、四六四
二六、〇一〇	一〇九、三三〇	一四〇、六六〇	二二三、一九六	二二一、九二四

右對支輸入合計額が我對外貿易總額中に占むる割合を見るに次表の如くであつて、嘗て米國と支那とが相並んで我貿易の二大支柱と稱せられてゐた事實は、今や全く過去の物語となるに至つたのである。

年次	米國	支那	英印	蘭印
一九二四	三・七%	一三・二%	二・八%	三・四%
一九二九	三・〇%	一二・一	一〇・六	三・六
一九三〇	二・九%	一三・二	九・七	三・九
一九三一	三・〇%	九・九	九・七	四・四

(貿易總額一〇〇%)

一九三二	三・〇	六・九	一〇・四	四・七
一九三三	二・八	五・六	一〇・四	五・四
一九三四	二・五	五・一	一一・三	四・八

即ちわが對支貿易は、最近數年間に於ては年々著減を示し來つたものであつて、對支貿易が我貿易總額中に占むる割合の年度別變遷を見ると、一九二四年を一〇〇とすれば次の如くであつて、其の現状は更に判然せられる。

一九二九年	九二%	一九三二年	五三%
一九三〇	一〇〇	一九三三	四三
一九三一	七六	一九三四	三九

一九三一年以降急坂を駆け下る如く減じたことに就ては、從來支那唯一の出超區域たりし滿洲の獨立が作用して居ることも考慮せられる所であるが、假りに我對滿貿易額一九三一年五千三百八十餘萬圓、一九三二年七千七百五十餘萬圓を夫々該年度對支貿易額に加算してみても、我貿易總額中に於ける地位は僅かに一四・一%、九・五%に過ぎず、孰れも一九二〇年頃まで占めてゐた一七%前後には及ぶべくもないのである。即ち換言すれば、支那貿易の最近の此地位は滿洲の

獨立に起因するものではなく、其處に幾多深刻なる原因の伏在するものといはざるを得ない。最近我對外貿易は國內産業全般の整理が一先づ完了すると共に漸く安定の域に達し、爲替上の圓安を利し、且つ有利なる労働の利用により、駭々乎としてひたすら發展の道程を辿り、それが爲め、漸次閉鎖的となり來つた世界各國の經濟界をして貿易上の「黃禍」を叫ばしめつゝある現狀である。此大勢の裡にあつて獨り對支貿易のみ何が故に斯くの如き減衰の歩調を辿らねばならなかつたか。良品にして且つ廉價なる我が製品が、しかも地理的好條件に恵まれつゝ、何が故にかゝる減退を見てゐるものであらうか。これが原因につき一般的にいふならば、第一に支那民衆の購買力の減退をあげなければならぬ。ではその購買力の減退は何に基くか。以下これを説明しやう。

第二節 支那の購買力減退

一國の購買力の數的表現は、先づこれを輸出入貿易額に求めねばならぬ。支那の對外貿易の最近の狀勢はどうであらうか。次表を見よ。(單位千(海關兩))

年次	輸出	輸入	合計	入超
一九二九	一、〇一五、六七六	一、三二五、七九	二、三八一、四五七	三三〇、〇九
一九三〇	八九四、八四四	一、三〇九、七五六	二、二〇四、六〇〇	五二四、九二
一九三一	九〇九、四七六	一、四三三、四八九	二、三四二、九六五	五三四、〇二
一九三二	四九二、六四一	一、〇四九、二四七	一、五四一、八八八	五五六、六〇五
一九三三	三九五、二二	八六三、六五〇	一二五八、八六二	四七〇、四三八
一九三四	三四三、五二六	六六〇、八八九	一、〇〇四、四一五	三二七、三六三

これに依れば如何に支那民衆の購買力が近年衰退してゐるか判る。右のうち、輸出に於ける激減は滿洲國獨立の影響によるものであらう。然し乍ら、最近の數字は、輸出に比し輸入額が著しく減退してゐる事を示してゐるのであつて、これ取りも直さず、支那民衆の購買力の減退を立證するものである。今、一昨年度支那對外貿易額を前年と比較すれば左の割合となり、此情勢は一層判然して來る。(一九三三年)

輸入	輸出	總計	入超
七六・五%	八七・四%	七九・九%	六七・四%

即ち輸出が僅々一二・六%の減少なるに比し、輸入は二三・五%で約四分の三に減少し、入超は約三割減で、金額にして一億五千三百萬海關兩の著減である。而も之れを月別の數字に依て眺めるときは、一九三四年度には支那輸出が割合に順調に経過したにも拘らず、輸入は同年上半期に比し、下半期は著しく減退し、上半期を一〇〇とすれば下半期は八一%であり、従て入超も一〇〇對六五%となつてゐるのである。以て如何に同國民衆の購買力減少が最近の生々しい事實であるかを知り得るであらう。

一昨々年來入超が減少した事は事實であるが、元來支那は貿易始まつて以來殆ど例外なく毎年入超を續けて來た國であつて、その決済は移民送金、外國の對支投資、外國軍隊駐屯費其他を以て賄はれてゐたから、國民經濟全體としては入超は左程の悲觀材料ではなかつた。故に最近に至り入超が減少したとしても、それが輸出の増加に基因するものでない限り、必ずしも國際貸借收支改善を示すものとして喜ぶことは出來ない。況んや數字の示す如く輸出も年々萎縮して來て居るものであるから、近年の入超減は單に同國購買力の減退を示す以外、何物をも意味しないことになる。

加之、支那が貿易上累年の入超にも拘らず、從來銀の一大需要國であつた理由は、上述の諸點に伏在するのであるが、此現象さへ遂に近年は姿を沒し、逆に銀の出超を示して來たので即ち最近の輸入減少が輸出減退との相關的關係に基くものでないことが判明する。

然らば購買力の減退は何に基因するか。以下これを各項目に分つて説明を進めてみよう。

第三節 支那の購買力減退の原因

第一、農村經濟の崩壞

農村の疲弊は現下の世界に於ける普遍的事實であつて、支那のみに特異なる現象ではないのであるが、四億の民衆中、素より適確なる調査はないにしても、大約八〇%が農を以て占められ、而も内二億即ち全人口の五〇%が小作關係農民であると稱される支那としては、農村經濟の盛衰如何が直ちに全面的經濟に影響を持つのである。換言すれば、支那經濟は農の礎石の上に構築せられたものと謂ふを得べく、それが近來各種の事情の爲めに衰退して來たものであるから、勢ひ商工業界もまた不況に襲はれ、更に全經濟機構が危機の不安を感じるに至るのである。世界經濟

が曲りなりに恢復しかけて來た昨今、支那財政の破局が頻りに各國に喧傳せられ、對日乃至對國
際借款問題が新聞を賑はすのもその根底に於ては、やはかりかゝる農村經濟破綻が原因をなして
ゐるのである。

由來農產物價の低落は各國等しく惱まされてゐる問題ではあるが、支那に於ては殊にこの傾向
が顯著で、民國二十二年（一九三三年）支那の代表的銀行たる中國銀行が發表した營業報告中の
數字に據れば同國代表的農產物價格は次の如くである。（單位）

品目	一九三二年平均價格	一九三三年平均價格
山東濟南の小麥	五・二八元	四・三二元
燕湖米	九・一一	六・一七
青島落花生	一三・〇〇	九・五〇
山東青州葉煙草	一六・五〇	九・〇〇

又社會經濟調査所の報告に據れば、上海農產物の卸賣價格總指數は一九三〇年を一〇〇とすれ
ば、三二年が八七、三三年が七七、三四年の三月が六八、六月が六九、九月が七四%で前年より
孰れも低落してゐる。左に同調査所報告の數字を借りて過去四年間の主要農產物價格暴落の跡を

示さう。（毎年五月調、一
九三〇年一〇〇）

	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年
漢口小麥	八三・〇%	八二・五%	六六・七%	五三・八%
上海棉花	二二・六	九七・三	八八・一	八三・一
豚肉	一〇七・七	八八・五	八四・五	七四・六
河南省黃豆	九・二	七九・五	六八・六	四八・五

次に食料品價格は一九二六年を一〇〇とすれば一九三〇年の一一〇・三%を最高とし、爾來低
落の一途を辿つて一九三一年が九四・四%、一九三二年が八一・七%、一九三三年が六九・六%
となつてゐる。（國定稅則
委員會調）

事情斯くの如くなるに、更に近年支那農民の租稅負擔は漸次増加し、地主、小作人共に一樣に
收入減並に高利貸資本の重壓に悩んでゐる有様である。而も農村疲弊の原因はこれのみに止らな
い。資本主義先進國の對支農產物ダンピング、國內農產物輸出の激減も亦大なる原因として擧げ
得られる。

一九三四年は右の事情の外、更に後述する天災並に共匪、土匪跳梁の爲め農產物の大減收を來

たした。同年上半期は天候順調にして一般に豊作を豫想されたにも拘らず、事實は大減收となり従つて農村の疲弊も殊更に甚大なるものあり、必然の結果として購買力も衰へ工業活動は退嬰し操短、休業續出を示したのである。

前掲中國銀行營業報告書は支那の産業及金融に就て眞面目な考察を加へ、將來の對策を致へてゐるが、農村經濟衰微が決して一九二九年以來の世界不況のみに因由するものでないことを認識して次の諸原因を擧げてゐる。即ち(一)農産物價格の下落、(二)農民負擔の増加、(三)外國農産物價格の下落の影響、(四)農産物收穫の低率これである。

要するに支那は其の購買力増大の爲めには今後努めて右の諸原因を克服して農村經濟の甦生を計らねばならぬことは一點の疑ひなき所である。

第二、銀價の問題

次に考察さるべきものは銀價の變動が支那購買力減退に與へた影響である。從來支那は銀を以て國際貸借決済上の基本貨幣として來たものであるが、今や銀は世界的に眺むれば既に本位貨としての價値を喪失して單なる一商品に過ぎぬ。従て其の價格の變動も常ならざるものがあるので

あるが、これは直接には支那對外購買力の決定に影響する所甚大なるものがあり、又間接ではあるが、國內物價に變動を與へ、延いて終局には再び對外購買力に關係を及ぼして來る。然るに銀價は過去二十年間に就て見れば(倫敦相場)、一九一七年の最高一オンス五五片から一九三一年の最低一二片まで大幅の騰落があり少しも安定を續けない。其の度毎に支那の購買力も亦動搖せざるを得ないのであるが、一部論者は一九二九年より資本主義最後の榮譽を死守した米國にも世界不況の大波が打寄するや、一九二六年以來止る所を知らない銀價の落潮が世界不況と相關々係を持つものと觀じ、大掛りな銀價引上策を講じた。斯くして支那始め銀に依據する東洋諸國の購買力を増し、以て世界景氣の立直りを計らむとしたのであつて、過去六年間小止みなく釣瓶落しの一途を辿つた銀價も之れが爲め一九三二年に至り漸く人爲的に昂騰し始めた。今銀價變動を表示すれば次の如くである。

年次	倫敦相場 片	年次	倫敦相場
一九二六	三六・七四	一九三一	一四・五九七
一九二七	一七・〇二	一九三二	一七・二〇

一九二八	三六、七八	一九三三	一八、二四
一九二九	二四、四九	一九三四	二、三八
一九三〇	一七、六三		

然るに極めて皮肉な事は先に述べたやうに支那の輸入貿易は銀價の動きと全く逆の途を辿り、銀價恢復の一九三二年に至つてそれ迄の漸増歩調から一轉して急激に減少して來た。左に支那輸入貿易額の變遷と銀價の變動とを掲げてをく。(一九二六年)

年次	銀價	輸入額	年次	銀價	輸入額
一九二七	九%	九〇	一九三一	五%	三三
一九二八	三	一〇六	一九三二	六	九
一九二九	三	一三	一九三三	三	七
一九三〇	三	二七	一九三四	三	五

支那は銀本位國と云ふものゝ大衆の手に流通する通貨は銅貨である。従て銀價の騰貴は銅價の下落を來し、爲めに又購買力も減退する理屈である。茲に於て曩に銀價の引上によつて支那の購買力を刺戟しようとした銀論者の企圖は脆くも破れ、却つて益々支那の不況を激化せしめた感が

ある。加ふるに近年の米國の銀價引上政策は支那保有銀の海外流出を盛ならしめ、折角世界的不況裡に於ても銀を本位とし、銀の保有を激増した爲めに多少中間的インフレ情勢を示して居た支那財界は、此米國の引上政策の餘波を受けて忽ちデフレによる金融恐慌、物價下落に見舞はれ、國民政府が輸出税を引上げ平衡税を徴收して懸命の金融市場安定策を講じたにも拘らず、現状のままでは金融恐慌不可避の状態を示現したのである。左に最近三ヶ年間の同國銀流出入高を表示せん。(單位千元)

年次	輸入	輸出	合計	入出超
一九三二	六、五九	五七、六六	一五四、八五	(入) 三、八九
一九三三	八〇、三三	九四、二九	一七四、四四	(出) 一四、二五
一九三四	七、四四	二六七、三五	二七四、七九	(出) 二五九、九四

而して参考に一昨年度對米銀純流出高は左表二五九、九四一千元の内四三、一八八千元である。

第三、内亂天災共匪軍閥の誅求

首題の諸項目も之を仔細に點檢すれば、一として支那民衆購買力減少の因素とたならぬものはな

い。支那の内亂、共匪、軍閥の苛斂誅求は周知の事實である。唯天災に就てはそれが著しく開化の遅れた支那であり、生産力の微弱な支那農村であるが爲めに、其の及ぼす影響は蓋し甚大なるものがあるのである。一昨年度旱害に關する國府賑務委員會の調査に依れば罹災縣數三六九、同じく面積一三三、八〇三千畝に達し、浙江省の五七%、江西省の五二%等は其の尤なるものであり、又同年の水災に就ては其の罹災省數一四、縣數二八三とある、而も實業部中央農業實驗所の報告では此の三倍にも及び、旱害に因る損失のみを以ても金額にして優に十三億五千萬元に達するといふ。

第四、排日運動

次に支那購買力減退の原因の第四として排外運動がある。義和團以來國民の間に組織的に訓練された此排外運動の中心點は古來遠交近攻政策をモットーとする支那に於ては主として日本に向けられるものであるが、其の結果廉價良品にして最も支那民衆に適合した日貨を排撃し、以て自國の購買力を抑制してゐるのである。此事實は支那の對外貿易に主要なる地位を占める對日英米貿易額の比較表を以て舉證し得るものと思ふ。(單位 百萬元)

年次	對日		對英		對米		對外總額	
	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出
一九三二	二二二	一六七	一八六	二四五	四一九	九三	一、六五六	七六八
一九三三	一三三	九六	二三八	四九	二九七	一三	一、三五九	六二二
一九三四	一三七	八一	二〇八	五〇	二七二	九四	一、〇五九	五三六
								合計
								二、四三四
								一、九七二
								一、五七五

右表に見る如く米國は總額に於ても輸入に於ても斷然第一位を誇り、之れに次ぐ日本は英國と極めて接近せる數字を示し、辛うじて第二位を支えて居るに過ぎず、總額に於ても輸入に於ても第一位たる米國の半ば以下といふ甚だしい懸隔を示してゐるのである。而も一九三二年を一〇〇%として對米、對日兩支那貿易の動きを見れば、最近の二ヶ年間の割合は前者が八〇%七一%であるに對し後者は夫々五七%五二%と半減して居るのである。

次に我對支輸出貿易は從來上海を中心とする中支に大部分集中せられ、對支全輸出額の約七割を占めて居たが、近年は排日の激烈な中南支に於て激減し、北支に於て増加を示して居るのである。次表は以て我對支輸出が如何に排日に阻碍されてゐるかを知り得るものである。

對支輸出額 (單位千圓)

年次	對北支	對中支	對南支	對關東州
一九三〇	六、六七	三、七七	六、八七	八、八二
一九三四	五、三三	六、〇九	一、三〇	三、八七

第五、關稅改正

近年數次に互つて國民政府は財政收入増加の目的を以て關稅率引上を行ひ、特に日本品に對して嚴なるかの感を抱かしめたのである。而して稅率引上の必然の結果として、且又其の爲めに派生的に増加した密輸入の結果として、我對支輸入貿易が阻碍せられた事も否み得ない所である。

第四節 結 論

以上論じた所に於て躍進を續ける我對外貿易中、對支貿易のみが近年如何に衰退し、如何にして減少するに至つたかを明らかにした。而して斯くの如き我對支貿易の阻碍は我國の不利たるに止らずしてまた莫大なる損失を支那に對しても與へるものである。同文同種最も友愛の情深か

るべき支那の不當なる日貨排斥の如きは克く支那永遠の發展を來す所以ではない。兩國の關係は斯かる人爲的不法手段を以て抑制し得るものではない。何故か、日本は對支輸出で多くを失つた。然しそれは北支で補つて居るのみならず、滿洲事變以後活潑となり來つた邦品の對支密輸出は關東州を通じて益々潜行を續け、實際上の我對支輸出額は數字上の減退ほど甚だしくはないと迄謂はるゝに至り、今や此輸出は隠れもない事實として一般の認める所となつて居る。一昨年度我對關東州輸出額が滿洲國獨立の前年に比し、一躍三四一%に上昇してゐることは此間の消息を雄辯に物語るものであらう。實に眞の必要は之を抑えんとして抑え得べきものではないのである。

然し幸にして本章冒頭に述べた如く最近に至り兩國親善工作が着々として進捗し、今や却つて列強嫉視の的とさへならむとする如き關係が恢復して居ることは洵に兩國の爲め欣快措く能はざる所である。昨年一月中の我對支輸出は此狀勢を鋭敏に反映して一昨年同月中の六百萬圓を超えるること二百萬圓の八百萬圓を示して居る。國民政府當局は今こそ此事實を正視し、且必要の前には何物も障礙物と爲し得ざる所以を認識して、速かに歪曲せられざる兩國交友關係の自然的正道に立かへらねばならぬ。之れこそ彼自身を救ひ、東洋平和への途であるからである。

第十三章 支那の進むべき途と採るべき方策

第一節 政治組織の完成

近年の支那の國情は絶えず混亂に混亂を重ね、これが爲めに國民經濟の發達が阻碍せらるることとは至大であるのみならず、國民生活そのものが常に少なからぬ脅威を被つて居る。勿論、打ち續く國內の動亂に馴致せられた支那の國民は一般世人が推測せる程自國の争亂に介意することなく、混亂を餘所にその業務に孜々として勵んでゐるといふ風のないことはないが、併しこれは一面、概して生活上に餘裕を有しない彼等にとつて已むを得ないところであると共に、彼の如くに國內の秩序破壊せらるゝに至つては、其國民生活上受くるところの打撃の輕微ならざるは、固より疑なきところである。蓋し斯くの如く國內に騒亂が絶ゆることなく、尙近年に至つては時として不健全なる一種の社會運動の勃發を見るに至つたのは、畢竟要するに、國內の統一紊れ何等政治の基本確立するなく、徒らに幾多の野心家が、無數に國內に散在せる無職の遊民無籍の流民を、

自己の權勢擴張の具に供するを得るが如き情態の下に在るが爲めに外ならぬ。即ち中央政府なるものは其名はあつても、何等その實を有することがなく、國內は宛も封建割據と異なることなき不統一極まる状態に在るが爲め、政府は、他方財政の極端なる窮乏と相俟つて、何等國民利福に資するに足る施政を爲すを得ないのみか、政治の腐敗官紀の頽廢は益々國家財政を紊亂せしめ、爲めに幾多の國債に對する元利の支拂も全く支拂不能に陥り、その結果、較もすれば、國際間に紛糾を醸成せんとするの勢をすら呈するに至つて居るのである。是を以て各國も、支那が何時までも今日の如き状態に在るは、畢竟世界の平和を脅かすものであるが、之を救ふの根本策は、一に中央政府の基礎を鞏固にし、國內の統一を圖るにありと爲し、幾たびか之を助成せんことを畫策したと共に、彼の華府會議に於ても、その劈頭に於て、支那に對し有力且安固なる政府の樹立維持の爲め、最も安全且障礙なき機會を與ふると同時に、各國は絶體に支那の統一を妨ぐるが如き舉措に出でないといふ根本原則を決議するに至つた。全く支那の今日の不幸なる状態を救ふには先づ國內の統一、言ひ換へれば國家組織の完整を遂ぐる事が、根本の基調たることは固より疑を容れない。

尙從來支那現在の紛糾錯雜せる債務を整理して、その財政の刷新を圖らなかつたならば、支那は最早破産の外ないと同時に、基礎の鞏固なる政府を樹立することも出来ないとか、或は支那の貨幣制度を改革して、全國の幣制を統一せしむると同時に、その本位制度を確立して金本位若くは金爲替本位に改めなくては、到底支那の經濟の振興を期することが出来ないとか、或はまた支那の交通事業の改善、商工業の發展を計らなくては、支那今日の衰運を挽回することは出来ないとか、種々の議論が高唱せられたが、併し國家統治の根基すら確立することなき支那の現状に於て、その根本の政治の基本を閉却して、唯獨り財務行政や交通行政乃至産業行政のみの刷新を圖らんとしても、到底その目的を達成せしむることの出来ないことは、火を賭るよりも瞭かである。現在支那の有らゆる制度が不統一紊亂の極に達し、經濟が尙頗る幼稚であつて、國民の大部分が依然として原始的の生活に沈淪して居るのは、要するに國家統治の根本定まらず、政治が何等國民生活に立脚することなく、唯少數職業政治家の遊戯の具に供せられて居るが爲めであるから、先づ何よりも支那を更生せしむるの第一途は、國民を基礎とした政治組織を完整せしむることとでなくてはならぬ。

近來支那の知識階級の間には國權回復熱が熾烈となり、彼等は不對等條約の廢棄や帝國主義の排除に對して、熱狂的運動を試むるに至り、時としては暴力を以てしてもその目的を達成せしめんとして、焦慮するに至つたが、併し縱し彼等の目的が貫徹せられて、各種の國權を回復し得たとしても、支那の現状を以てして、果して回收した國權を公正に活用して行くことが出来るであらうか、或は折角回收した國權も、何等國民全體の利益の爲めに活用せらるゝことなく、却て少數職業政治家の私利を充たすの具に濫用せらるゝことがないであらうか、極端に政治が國民生活に没交渉となれる支那政界の現状が、根本より改革せられない以上は、國權が公正に擁護せらるゝや否やは大に疑なきを得ない。この見地よりするも先づ國家統治の基本を確立することが何よりの急務と謂はざるを得ない。

第二節 中央集權制の困難

併しながら、彼の老なる國土に數億の民生を包有し、幾千年の歴史を閲したその實際に就て觀るに、支那の政治上の統一の極めて至難なるを惟はざるを得ないのである。即ち支那の古い歴

史を通じて今日に至る迄に、完全なる集權的國家の出現を見た例は極めて稀であつて、而も全國を統一したと稱しても、多くは唯中央に貢賦を集め、以て宮殿の美を飾りて威を示し、その財政の比較的裕であつた時代をいふもので、中央の命令が全國に普く徹底し、地方政治を自由に管理し得たのは、各王朝の初期短期間に過ぎない。即ち秦漢以後形式上郡縣制度の採用を標榜したとはいへ、實質上は依然として封建制と異なることなく、極端なる地方分權であり官治分權制であることが、古來支那政治の特色と言つてよい。勿論、支那でも明清時代が支那固有政治の最も發達した時代であつて、比較的支那の社會に融合した政治の行はれた時代であつたが、併し從來清朝が所謂強弩の末勢で辛うじて維持し來たつた形式上の中心力が、數百年來漸次反動的に旺盛になつて來た遠心力の出現に依つて破壊せられ、革命となつたものであるから、今更固より世界の趨勢に逆行した壓制的なる舊式の政治の再び行はる可くもない。

凡そ何故に斯くの如く支那の統一が困難であり、殊に集權的國家の成立を至難とするかといふに、其根本は少なからず各地間事情を異にする廣大なる國土を打つて一丸と成し劃一的政治を行ふことが、特に交通の發達しない以上、殆ど不可能なるに基因するが、更に今日に至つては、支

那上下の國民に殆ど國家組織を完整せんとする希念の缺如せることに由つて、一層如上の困難が助長せられてゐるものと言つてよい。即ち古來支那の政治が、萬機親裁に依る君主獨裁でありながら、他方極端なる地方分權制を馴致せしが爲めに、彼の徳治主義を傳統的理想と爲し來つたと相俟つて、甚だしく消極主義に陥るに至つた結果、勢ひ政治は國內に普及することなく、全く帝王の爲めの政治、一部貴族の爲めの政治となるに至つたのである。斯くして政治が一般人民の實生活とは全然没交渉のものとなるに至つた爲め、自づと人民間に自治制度が著しく發達することとなり、政治上の保護を必要とせざるに至つたのみならず、尙漸次政治が少數野心家の權勢争奪の具となるに反んで、遂には人民は政治を害惡視し、之を忌避せんとするに至り、爰に國民生活を政治より防守せんとする強固なる社會組織を建設することゝなつたものである。

斯くの如くにして政治の實際は、益々國民をして政治より遊離する心理作用を強烈ならしめ、國民は夫々國家を離れて強固なる自治體を建設し、そこに自己の生存を依據せしめ、殆ど國家組織の完整を顧念せざるに至つた爲め、益々政治は少數職業者の左右するところとなり、政權の争奪を熾烈ならしむるに至つたものに外ならぬ。されば、さらでだに幾千年來行はんと欲して行ふ

ことの出来なかつた支那の統一、殊に集權的國家の組織は、決して支那に於ては容易なる業ではない。數年前革命軍が、三民主義の旗幟を高く掲げて、南支那の大半を席捲するに至つたが、その進出の豫想外に急速であつたことと、一部の人心を收攬し多大の共鳴を受けたことの爲め、一部人士より大にその前途が囑望せられ、恐らく遠からずこの國民黨に依つて全國が統一せらるゝに相違ないとまで期待せらるゝに至つた。而して此等人士の主張したところでは、從來の軍閥は全く自己一身の私利の爲めに争つたものであるが、革命軍は全く一定の主義を實行せんが爲めに、革命を行はんとするものであると共に、支那の一般國民も舊時と異なつて、歐洲戦後の世界思潮の影響を受け、今や著しく國家的に目醒むるに至つたから、必ずや舊軍閥を一掃し全國を平定す可く民心を得るに相違ないと強調したのである。併し三民主義なるものも、これが眞意を實際に理解し得るものが、その共鳴者と稱する者の中でも果して幾人あつたであらうか。古來聖賢政治を理想と爲し來たりながら、殆ど之が實現を期することの出来なかつた支那に於て、さう容易く理想政治が行はる可きものとも惟はれないことは、當時余の斷言したところであつたが、其後の事態は不幸にして大體余の指摘した如くである。殊に國民の大部分が、依然として政治を逃避し、

極端に政權の推移に冷淡であると共に、その國情が、いつ迄も少數の野心家と無數の遊民とに依つて政治を弄ぶことの出来る状態にある以上、たとひ革命軍の力に依つて舊軍閥を一掃することが出来たとしても、更に革命軍の間に分裂作用を起して、相互に勢力を争ふに至ること、過去に於ける北洋軍閥と同様の結果を生ずるに至る可きは、火を賭るよりも瞭かであつて、國內の統一、殊に集權的國家組織の完成の如きは、決して遽に期待し得るものではないのである。

第三節 國民の政治的覺醒

上來叙ぶる如く支那の今日爲す可き最大要務は、國內の統一を圖り政治組織を完整せしむることであるが、これが爲めには、先づ中央政府の基礎を鞏固ならしむることが必要であるとの議論が、從來多く行はれ、諸外國も亦如上の策を採るの外なしとして、之を助成せしめんことを圖り來つた。現に我國の如きは、會て極力段内閣を援助して國內を統一せしめんことを策し、俗に西原借款として知られてゐる如く、一億四千五百萬圓に上る巨額の資金をも供給したことがある。併しながら、支那の統一も國民の國家的自覺と愛國の熱情とを基調として初めて期待せらるゝも

のであるに拘らず、今日の如く國民の大部分が國家の政治から逃避せる以上は、その國土の尨大に失し交通機關の發達不十分なると相俟つて、到底中央集權主義の政治は成功す可しとは惟はれぬ。舊來の支那の政治が君主獨裁でありながら、結局極端なる地方分權制に陥つたのも、畢竟これが爲めである。比較的支那の社會に融合した政治の行はれ、清朝といふ二百年來の積威を有つた中心のあつたその末年に於てすらも、中央集權策に依つて統一力を振起せしめんとして失敗に了つたのであるから、上に述べた如く形式上の求心力の全く破壊し、遠心力の急激に發達した現代に於ては、殊に中央集權策は到底成功す可くもない。従つていつ迄も到底實現の見込なき中央集權策を固執する事を排し、或は統一力としては多少薄弱であるかも知れないが、一種の變形した聯邦制度を國の基礎として、それに依つて統一するの外ないであらう。元來支那の社會組織では、上にも述べた如く自治團體の特に發達せるを長所として居るから、これが利用の方法如何に依つては、地方自治の基礎を樹立することは必ずしも困難ではない。而して從來支那の最大弊害とせられた民政請負組織を根底から廢絶せしめて、同一地方出身者を任命するといふ郷官制度を採用したならば、地方官も遂には自づから地方の利害休戚を念とするに至り、いつかは多年の積

弊も漸次に一掃せらるゝことを期待し得ないことはないであらう。而して尙支那は列國の均勢上全く國防を廢止しても、他國の侵略を受け、その獨立を危ふくするが如きことはないから、軍備を全然撤去して自治團體に地方の警備を任しても決して危険はないのみならず、これに依つて從來國內擾亂の根源であつた軍隊といふ最大禍根を除くことが出来る。何れにしても、過去幾千年間集權的國家の出現を見た例に乏しき事實よりしても、實現の殆ど不可能なる中央集權策は之を排し、中央政府の權限は可及的之を制限し、その財政の如きも極力之を縮小し、地方分權を國の根本として統一策を講ずるをむしろ得策とするであらう。

斯くの如くにして地方の獨立は或程度まで之を認めることとしたならば、從來中央政府が尨大なる領土に徒らに空文の命令を下し、目的の政策を遂行することの出来なかつた弊を除くことが出来ると共に、元來支那の政治が消極主義であつて、殆ど國民の生活を保護することがなかつただけ、支那人は概して自治思想の著しく發達せるに加へ、祖先崇拜の思想強烈なるが爲めに、特に地方的觀念厚く、愛郷心が熱烈であつて、現に同郷者を中心としてギルドを組織することが行はれ、軍閥が互に相争ふも、主として郷里を中心として團結せるものであるから、各地方が自治

主義の政府を樹立することになれば、或は案外速かに地方行政の基礎を確立するに至りはしないかとも惟はれる。上に述べた如く極端に國家思想の薄弱なる支那の國民のことであるから、彼等の地方觀念自治思想の發達せるを利用して、地方自治を根據として、統一の方策を樹つるの外、全く他に適策がある可くもない。

但し支那に如何なる政治を施行するにしても、結局一國政治の基調は、國民の奉仕的觀念、即ち全利的意志の發露に根據せねばならぬものであるから、内藤湖南博士が其著新支那論に於て説ける如く、若し到底自治的行政に依つて成立つことの出来ない程、支那の國民の政治德義が根本的に敗類して居るものとせば、支那は到底共和政治も立憲政治も實行するに適應しない國であつて、特別の德義の低い壓制政治にでも依つて、統治するの外なき國であるとしなければならぬ。勿論、軍事上より支那が自發的に革新した實例は、幾多歴史上に存在すると共に、單に統一のみ求むる點よりすれば、獨裁政治は寧ろ最も捷徑であり適策たるを失はないが、持續性を缺くと共に、較もすれば將來に禍根を貽すの惧があるから、固より敢へて推奨するを得ない。

之を要するに、支那の統一は決して世人の想像する如く爾かく容易に成るものでなく、結局、

これが爲めには地方自治制を基礎として進むの外ないが、併し夫れも矢張支那國民の自覺と自發とに基かなくては、到底その目的を達成し有終の效果を見ることは出来ないから、國民の大部分が政治に冷淡なる現状より、彼等を覺醒せしむることが何よりも急務たるを失はない。然らざれば第一に支那統一の最大の禍根たる軍閥の地位を奪ふことが出来ず、いつ迄も多數國民は彼等軍閥の私闘の犠牲たる境地を脱することが出来ないであらう。支那の一般政治家の政治道徳は極めて低級であつて、上下の官吏は相率ゐて公器を濫用し、國政を弄び私利を圖るに吸々たるの情態であつて、支那を今日の悲運に導いた原因の一半は爰にあるものであるが、これも畢竟國民が政治に没交渉であつて、何等輿論の監督が存在しない爲めであるから、この點よりしても、國民の政治思想を喚起せしむることが必要である。勿論、支那に於ても産業革命の氣運の醸成せらるゝに従ひ、漸次經濟組織の改造を促すこととなり、その結果、これ迄國民生活の安全境地と恃み來たつたその社會組織に動搖を生ずることとなり、延いて國民の政治的自覺を刺戟するに至るであらうが、併し斯かる時期の到來は今遽に之を期待することは出来ないであらう。

近來上にも述べた如く支那の知識階級が、國權回復運動に熱狂して居るが、彼等は毫も自國內

政の腐敗紊亂に對して自省することなく、支那の今日あるは一に列國の資本主義的侵略にありと爲し、咎を一に外國にのみ歸し、暴力を以てしてもその國權を回收せんと焦慮せるに至つては、それが果して眞に自國を思ふ所以なるや否やを疑はざるを得ない。勿論、彼等が穩健なる主張に依つて、列國の理解を求め、自ら資格附けることに依つて、その正當なる權利を回收するの手段を採らないで、徒らに焦燥して暴力を用ひ、直接行動に依つて目的を急がんとするその心理作用は、一はその環境の生み出したものとも觀られ得るので、即ち絶え間なき軍閥の争亂は、常に平和なる國民を不安と貧困とに泣かしめ、列國の高壓的侵略は、面目を重んずる國民の自尊心を著しく傷け來たつたことを思へば、彼等が一たび自己の環境を顧みて、較もすれば勢ひ自暴自棄の舉措に出でんとするは、已むを得ないところとも觀られ得るのである。寔に彼等のその境地と心理状態とに思を致せば、一掬同情の涙なきを得ないが、併しいかに滿腔の同情を寄せても、そのことが延いて近來の如き彼等の暴舉を容認す可き理由とはならないのみならず、その行動は決して支那自身の爲めを圖る所以ではない。上にも述べた如く縦したとひ彼等の力に依て國權が回收せられたとしても、その内政が依然として今日の如くであつたならば、回收し得た國權が、果して國民を得なく。

生活の利益の爲めに公正に活用せられ得るや否や、頗る疑問であるのみならず、その極端なる排外運動に至つては、別に述ぶる如く一種の自殺的暴舉とも言ふことが出来るのである。従つて徒らに極端なる排外運動に狂奔するよりも、寧ろ國民の政治的覺醒運動に猛進せんことを望まざるを得なく。

第四節 資源開發の急務

上來述ぶる如く、支那統一の大業を成就せしめんが爲めには、一面、國民の政治的自覺を喚起せしむると共に、他面、その特に發達せる自治制度を利用し、聯邦制度を國の基礎として、統一の歩を進むるの外ないが、併し夫れにしても、今日の如く國民の實力が薄弱であつては、到底その目的を十分に達することが出来ないから、更に彼等の實力を充實せしむることが緊要である。而してこれが爲めには、先づ支那の秘藏せる天然資源の開發を圖ることが根本策である。即ち經濟資源の開發に由つて民衆の力を増すこととなれば、勢ひ軍閥の壓迫に對しても自づから抵抗力を生ずるに至り、國民自身がその統治機關を今日の郷團其他の自治組織に限らないで、更に省乃

至全國に及ぼすこととなり、爰に國民を基礎とした統一的政治組織の完整を促進せしむるを得るに至るものと謂はねばならぬ。それに従來支那の統一を妨げて居る障碍の一は、支那の特産物ともいふ可き無職の遊民、無籍の流民を首めとして、土匪、群盜、土棍、梟徒の輩が無數に散在せることである。これあるが爲めに、絶えず國內の安寧が脅かされるのみならず、彼等を糾合して野心家が互に權勢を争ふに至り、常に和平統一の一大禍根となつて居るのである。然るに支那の官僚政治なるものは、臣僚には何人にも完全なる權力がないと同時に、十分なる責任もないといふ有様であるから、各地方官は唯此等の徒を管外に驅逐することのみに腐心する實情であつて、これが爲め到底徹底的に之を匡治することが出来ないといふ態である。従つてこの點からしても、地方自治制を基礎として改造の歩を進むるを必要とするのであるが、この禍根を根本的に除却せんとせば、先づ何よりか此種の細民に生活の安定を得せしむることを急務とするのであるが、これが爲めには、その豊富なる資源を開發することが第一の要件と言つてよい。而してまた支那の財政が甚だしく窮乏せる根本原因の一は、その經濟の幼稚であつて不振なることにあるから、今後中央地方政府の基礎を鞏固ならしむる上よりしても、經濟の振興が支那改造の根本策と

謂はねばならぬ。

勿論、輓近支那に於ても産業振興が漸次熾烈となり、産業保護の要望が一般に熱烈となるに至つた結果、一面關稅政策に依つて工業の振興を圖らんとするのみならず、尙甚だしきは原料天産品の輸出を阻止して、以て國內工業の發達を促進せしめんとの議論すら起るに至つた。併しながら支那の如き國情の下に於て、斯かる急激なる工業保護政策を施すことは、却てその急務とせる經濟資源の開發を妨げ、その經濟の健全なる發展を阻碍することとなるの惧あるは、別に詳論した如くである。

而して支那の經濟が、今尙純然たる農本的性質を有し、廣大なる土地と、これが開發に適當なる低級生産能力のある無數の労働者とを有する以上は、その經濟を振興するの根本方針は、矢張農業とか鑛業とかいふ原始産業の發達を圖ることではなくてはならぬ。而して尙これが爲めには、是非とも外國の資本と技術との力に俟たねばならぬことは、過去の事實の明かに實證するところであるから、支那としては、この際多少の屈從は之を忍んでも、極力外力を利用して、銳意資源の開拓經濟の充實に勇往邁進するを得策とするのである。然るに近來の如く暴力にまで訴へて、

唯徒らに外力の排斥を圖らんとするは、益々支那の産業の開發を妨げ、却て自國を衰退に導くものと言つてよい。即ちさらでだに極端に國內に資本缺乏し、産業振はず、經濟の極めて幼稚なるが爲め、國民の大多數が生活の壓迫を受け、社會が無數の細民に惱まされて居る支那の現状に於て、この上更に外力を徒らに排斥せんとするは、全く一種の自殺的暴舉たるを失はぬであらう。

第十四章 紊亂せる支那財政の實相

第一節 緒論

財政は國家の神經であるといはれてゐることく、依つて以つて立つところの政治の基礎であり、且つその實情を最も適確に示すものであるから、各國政治の變遷も財政に基因する場合が多きを占むるものであるが、殊に支那にあつては、更にその感を深くせざるを得ないのであつて、歷朝の興廢は主としてその財政に基因するところが少なくない。即ち本來、歷代王室の業を樹つるや、そのはじめは政治が頗る簡易であつて、文武の官も多からず、地方貢賦は之を支へて充分餘りあつたから、こゝに於て仁政と稱して地方に對し賦税を輕減し、徳政に順服せしめたが、創業以來歳を重ねるに従つて、皇族増し官吏濫りに加はり兵丁いよ／＼多くして、中央の經費昔日に倍蓰するに至り、かくして財用足らずして賦税加はり、賦税加はつて兵亂起り、兵亂起つて益々額定の資に窮し、つひには民心離反して社稷倒るゝを常態としたものである。現に明はその當初

の全國歳入四百萬兩（中央收入二百萬兩）であつたが、その末葉に及んで邊疆の擾亂に艱み、萬曆四十一年より地租の増徴を命ずること五次、歳入一千六百七十萬兩（中央收入千二百萬兩）となつて亡び、清もそのはじめは、深く歷朝興亡の跡に鑑みて、明末増徴の諸税を免じ、ひたすら輕賦休民策をとり、中央の支出も従つて四五百萬兩を以て足り、乾隆以後増加したとはいへ、全國の歳入三千萬兩に對し、中央の収入は八百萬兩であつて、國庫常に餘帑を蓄へ、當時地方より中央に送るべき地租を免ずること四回に及び、清朝三百年を通じての最盛期といはれたが、嘉慶道光を経て咸豐に至るに及んでは、一面冗官増加し八旗戸口繁殖して、支出漸増せしに加へ、外は英佛と難を構へ、内に髮賊の大亂起り、尋いで光緒末年には更に外は日本と戦ひを交へ、内に團匪の騷亂あり、ために光緒二十二年より地租に附加税を課すること四次、その他新税を起し諸税を増し、全國の歳入三億兩、中央の支出七八千萬兩に膨張したが、なほ國用を充たすことが出來ず遂に宣統帝退位の止むなきに至つた。もとよりその亡ぶるには種々の原因の存在するものであつて、増税のごときはむしろその原因より來る結果であると見られないことはないが、中央の安危は一にこれによつて決定せられたものといつてよい。

民國以來は、地方財政獨立の勢を激成せしめたため、中央に對する地方貢賦が激減することとなり、中央の財政は勢ひ内外債の濫興によつて支持するの外なきに至つたとともに、爾來政變絶ゆることなく、政府の更迭せられること十數回に及んだが、それも原因の大部分は財政の行詰まりからであつて、今更ながら、支那財政の政府の興廢に關するところの重大なるを思はざるを得ない。

しかしそれにしても、清末以前の財政にあつては、所謂量入制出主義を主眼となし來つたがため、國庫の窮乏も畢竟一王朝の安危興廢に關するに過ぎなかつたが、一たび前清末急を外資に仰ぐ端を開いてよりは、支那の財政難は、たゞに國家の内政問題たるに止まらざるに至つた。即ち清末支那が日清役並びに團匪事件のために、一時に巨額の外債を負擔してよりは、絶えず財政上の破綻を借款によつて補救せざるを得ないこととなり、殊に革命後は内外債を以て辛うじて財政を支持するの外なきに至り、その結果、たゞにその財政を殆んど救ふべからざる深淵に陥るゝこととなつたのみならず、その虚に乗じて、たゞ各國の帝國主義的外交の發現と相まつて、一時は熾烈なる列國の利權爭奪をも招致し、遂にはまさに支那が國際俎上に於て分割若くは共同管

理せられんとする形勢をすら馴致するに至つた。その後歐洲大戰に伴ふ國際政權の變遷に基づき、支那はその悲運を免かるゝことゝなつたけれども、その財政の窮乏紊亂は更に甚だしく、しかもいまや巨額の内外債元利が支拂ひ不能に陥り、財政的には全く國際信用を根本的に失墜するに至つた。即ち支那の中央政府の外債にして、擔保の不確實なるがため元利の支拂停頓せる額は、いまや邦貨にして十三億數千萬圓の巨額に達し、しかもその内わが國の債權額は最も多く六億數千萬圓に上るのみならず、わが國はなほその外に支那の地方政府並に民間諸會社その他に對し巨額の未拂債權を有してゐるのであるから、支那の財政問題は支那自體の政局に重大なる關係を有するのみでなく、直接わが國にとつても閑却するを得ない重大事といはねばならぬ。

第二節 歳出入の現状

凡そ支那政府の歳出入が幾何になるかは、世人の齊しく知らんと欲するところであるが、由來數字を論ずるは君子の恥づるところであるとして處理し來つた財政であるため、全國の歳出入は勿論、中央政府の年々の收支すら、到底之を審かにするを得ないといつてもよい。しかしなが

ら、その財源は比較的單純であつて、主として租税によれるは勿論、しかも、その種類の如きも、一千年前の唐宋時代より近年に至るまで地租、關稅、鹽稅及び雜稅の四者を主たるものとなせるに過ぎない。蓋し支那にあつては、由來法制的變革は王朝の更迭よりも難しとせられ、殊に賦稅の改革に至つては、租稅の輕重を以て政治の善惡を卜する國民の傳統的習性上、一大難事であつて、稅制の根據は古今殆んど一貫して變易することなく、歷朝命を革めても、稅制は舊によつて異なるなきをその特色とする。而して從來これ等の租稅は、すべて國家の收入として地方政府の徵收に委ねられ、一定額のみが中央に輸せられ、殘餘は地方經費に充當せらるゝ制度であつたから、中央の財政はいはば地方よりの送銀額によつて決定せられたものである。しかるに共和政府肇立以來、國內の不統一は、遂に地方財政の獨立を激成せしめ、國家收入の太宗たる地租は、歷年各地方政府に截留せられて、全く地方稅たるの觀あるに至り、鹽稅のごときにしても、中央の實收となる額が頗る不確定であり、雜稅は元來が地方稅的性質を有してゐたため、革命後中央政府では雜稅の一たる烟酒稅に改良を施し、中央專款なる名目のもとに中央直接の收入たらしめんことを企つると同時に、新たに捲烟統稅（卷煙草消費稅）印花稅（印紙稅）、綿製品麥粉燐寸そ

の他に對する統稅（一種の消費稅）などを設くるに至つたが、根本の政治組織が完整せらるゝこととなくして、獨り租稅行政のみの改善を圖らんとしても、到底その目的を達成せしめ得べき理がなく、殊に租稅道徳心が低く、國民の大多數が輕稅、否な無稅を以て最善の政治となしてゐる支那に在つては、これ等の新稅の容易に實績を擧ぐるを得ないのは論を俟たないところであつて、たゞ統稅に於て近年相當收入を擧ぐるに至つた外、中央歳入の上に於て特に見るべき實績を示すに至らない。

國民政府當局の發表せる最近の豫算としては、民國二十四年度（自一九三五年七月一日至三六年六月三十日）豫算であつて、それによれば、歳出入の狀況左の如くである。

支那政府民國廿四年度豫算

（國民政府公報掲載、日銀海外經濟彙報譯載）

(一) 歳入の部

摘要	一九三五年度豫算額	一九三四年度豫算額	一九三三年度
(A) 稅收	八八七、一五四、〇〇六元	八六八、一一〇、三三四元	六三二、六五八、九五七元

(1) 關稅	三四一、三六一、四〇〇	三三三、八二四、二四一	三五三、三九八、五五九
(2) 鹽稅	一八四、二九〇、〇〇〇	一九〇、三三三、八五一	一七二、二七五、二七三
(3) 統稅	二二、三九八、一七七	一一六、九五九、六七九	一〇四、九七七、九六五
(4) 煙酒稅	三三、三三九、一八六	二二、一〇四、八七五	一三、〇七三、五八五
(5) 印紙稅	三三、〇〇〇、〇〇〇	一一、八八四、二八六	八、三七八、九二二
(6) 鑛稅	三、八七三、二二四	二、七三三、九七九	一、六一九、九五九
(7) 取引所稅	一、九五〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	三五、二〇〇
(8) 銀行兌換券發行稅	一、六〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、五三六、九四一
(9) 所得稅	五、〇〇〇、〇〇〇	—	—
(10) 國有財產收入	八、八四六、八五〇	五、五四四、八七八	二、五四一、三九三
(11) 國有事業收入	二〇、八五五、〇三三	二一、三〇四、〇六〇	一七、七三六、四三三
(12) 行政收入	一〇、九三二、九九九	三、五二七、〇八六	三、一八六、九七三
(13) 國有營業純益	四〇、二六八、八五一	八、三四九、五六七	二、四五二、四四七
(14) 地方政府送金	三、七六八、〇〇〇	六、五八八、〇〇〇	二、五二、八八九
(15) 其他收入	(八) 一六、八三三、三三三	(二) 八三、二六五、五三四	三、九三九、九〇八
減—徵稅費及戻稅差引	—	—	六七、八二九、三八〇
(B) 公債及借入金收入	七〇、〇〇〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇、〇〇〇	一七九、九五九、三三三
(C) 前年度剩餘金	九五七、一五七、〇〇六	九八八、一一〇、三三四	二七、〇九三、三九九
總計	—	—	八三八、七二一、六八八

日滿支經濟論

註 (イ) 新設の取引稅收入一、八〇〇、〇〇〇元を含む。

(ロ) 内二〇、〇〇〇、〇〇〇元は財政部、交通部、鐵道部に於て捻出、但し其分擔額は未定。

(ハ) 内一〇九、七九三、一九七元は臨時部に於ける其他收入にして、財政部、鐵道部等の借款又は公債收入より成るもの、如し。

(ニ) 内七六、〇〇七、一七四元は對米棉麥借款、導准委員會借款、玉萍鐵道公債收入等より成る。

(一) 歳出の部

摘要	一九三五年年度豫算額	一九三四年度豫算額	一九三三年度
(A) 黨務費(國民黨費)	五八七〇、八〇〇	五、七〇、七〇〇	五、五八九、五八五
(B) 政務	二八六、七四二、四六八	二六四、二〇七、四三三	九八、八九三、四九六
(1) 國務	二二、五七八、六七三	一二、七八八、二八〇	一五、四七三、一二二
(2) 内務	四、三七一、三〇八	四、五三五、八六九	四、一九〇、七八〇
(3) 外務	九、四〇一、二九五	八、八二六、八八六	九、九三〇、五四九
(4) 財務	六六、〇一一、三四三	六八、一九三、八二四	四、九七三、三八六
(5) 教育	三七、二二一、六一一	三三、八一九、三六五	一三、三三八、〇〇八
(6) 司法	二、八三四、八〇五	二、九三三、九一〇	
摘要	一九三五年年度豫算額	一九三四年度豫算額	一九三三年度
	元	元	元

(7) 實業	四、三八九、七八〇	四、一三四、三九〇	一、五七八、〇七三
(8) 交通	四、九三九、一三三	五、一九九、七五二	四、九〇九、〇三四
(9) 蒙藏	一、七三二、八四四	一、四二五、五三〇	一、五七六、八三四
(10) 建設	三六、三五四、八九〇	三五、九九〇、〇三六	六、八一三、三六四
(11) 補助	(イ) 一〇一、九八〇、〇八九	八二、五九九、九三五	三三、〇〇一、三三三
(12) 撫恤	四、九三六、六九九	三、七六一、六六五	一、一九一、一八三
(13) 救濟			三、九三三、八六六
減—各經費剩餘額差引			九三九、〇二五
(C) 軍務	三三二、〇〇〇、〇〇〇	五三二、九九〇、九二〇	三七二、八九五、二〇三
(D) 軍務稽核所より地方長官への給付			三三、〇〇三、七三九
(E) 鹽務稽核所より各項基金の繰入	二七四、八〇三、一七九	二五七、五三〇、二二一	九四三、二二二
(F) 債務費及賠償金	六〇、九七一、六六六	五〇、三八七、二一六	二四四、二七八、三三八
(G) 國有營業資本支出	七、七六六、二九五	七、三四三、〇五五	
(H) 豫備費	九五七、一五四、〇〇六	九一八、二二一、〇三四	八八、七二一、六八八
總計			(ロ) 八三、一〇九、二二五

註 (イ) 内四五、三九九、一九五元は各省市府に對する補助費、又三六、八〇〇、〇〇〇元は邊境各省に於ける流用額。

(ロ) 諸假拂金二三、五一九、八八二元及年度末手持現金五九、五八九、三三三元よりなる。

從來支那の財政にあつては、豫算あつて決算なしといはれ、しかもその豫算なるものも全く架空な形式的數字の羅列に過ぎなかつたものであるが、近年政府は、たとひ依然として形式的數字ではあるにしても、中央の收支決算をも發表するに至つたのであつて、これは支那にとつては大進歩といつてよ。

しかし上掲の數字にしても、必ずしも中央の實際收支として信憑し得べきものでないのみならず、収入各項目中に於ても、それ等が全部中央の實收となるものでないことは想像に難くない。現に収入總額九億五千七百萬元のうち、租稅收入が合計八億八千七百萬元になるけれども、その全部が直接中央の實收となるものでなく、その一部が地方軍費に對する補助の形式のもとに、地方政府によつて費消せられてゐることは周知の事實である。殊に公債收入に至つては、これは單に、その發行總額を計上したに過ぎないものであつて、公債の發行は、後にも述ぶる如く、表面の發行價格は九二乃至一〇〇であるが、實際は九〇以上のもの殆んどなく、多くは七〇乃至八〇内外であるから、一億元の公債を發行しても、政府の實收額は七八千萬元に過ぎないのである。従て現在中央政府の最も信賴し得べき収入は、上掲豫算の示す如く關稅收入であるが、しかしそ

れとても、もと關稅事務は海關總稅務司によつて完全に管理せられ、關稅事務を司る支那政府の機關であつた稅務處なるものは何等の實權を有たなかつたのであるが、國民政府は十七年六月、稅務處を廢止し、海關事務を南京の關稅署に移して財政部の直轄に歸せしむると同時に、關稅收入金の出納のごときも、從來總稅務司の同意を得なければ、政府といへども如何となし得なかつたものを、反對に總稅務司の特權を奪ひ、財政部長の命令で自由に出納し得ることとなし、總稅務司は職責上國民政府の命令を秉承し關稅事務を專理する以外、すべて政治に干渉し及びその他の範圍は絶対に預聞するを得なくなつたのである。その結果關稅收入の一部は、現に廣東政府によつて任意に費消せられてゐる有様である。次に鹽稅に至つては、前後大借款の成立に際して、同收入がその擔保となつた關係上、外人の資助によつて大いに改善せられ、従つて一時中央の收入となる額も大いに増加したが、十六年夏、外人の監理せる鹽務稽核所が一旦廢止せられ、十七年九月、政府は再びこれを復舊したけれども、鹽稅負擔債務の處理を財政部に歸すると同時に、稽核所もまた直接財政部の指揮を受けしむることとなしたがため、爾來内亂の續發と相まつて、中央實收額は激減し、その結果、從來鹽稅收入から支拂つてゐた善後大借款の償還基金を關稅負

擔に轉嫁するの已むなきに至つた。従つて上掲報告に於て鹽稅收入一億八千四百萬元の巨額を計上してゐるけれども、これ單に中央に報告せられた全國の收入を計上したに過ぎないものであつて、中央の實收となるものは、その一少部分を占むるに過ぎないのである。

たゞ中央の實收入として、相當成績を示してゐるものは統稅、就中捲烟統稅である。これは捲煙草に對する國內消費稅であつて、租界内に於ける製造業者は容易にこの稅に従はなかつたが、十七年一月財政部は遂に華洋各商と辦法を協定し、あらゆる葉卷及び紙卷煙草は國內製造たる輸入品たるを論ぜず、輸入稅を除くほか、一律に内地統稅從價百分の二十二半を徵收することとし、翌年これを百分の三十二半に増稅して、出廠又は輸入に際して全徵することとしたのであるが、南京政府の勢力下にある上海が本品の製造に於ても輸入に於ても中心地であるがため、本稅は政府にとつて重要な財源となるに至つたものである。捲煙統稅に次いで大なる收入は、各地駐在軍隊の直接徵收及び禁烟收入（阿片稅）など不良性收入が大部分を占め、政府の公然これが明細計上を憚る種類のものであつて、しかも不定の收入である。

第三節 國民政府と浙江財閥

以上述ぶるところによつて明かなる如く、現に南京政府の財政を支持してゐる確實なる收入は、關稅については公債收入であつて、財政上の根本要求たる經常歲入を填補するためには、經常歲入を以てすべしとの原則を破り、全く經常費の不足を公債收入によつて補救してゐるものである。しかもこれに對する經費の用途について見るに、黨費及び行政費の支出が約二億九千萬元であつて、債務償還及び外國賠款が二億七千萬元を越え、その他の三億二千百萬元は悉く軍務費である。即ちこれを建設的訓政の見地から見ると、歲出の六割以上は殆んど無意義の支出といつてよい。

國民政府の財政状態は、忌憚なくこれを評すれば、いはゆる借債度日その日暮しであつて、北京政府が辛亥改命後、引續いて内外債を濫借濫費し去り、新民國の建設事業としては何一つ成功したものがないのみならず、反つて舊來の良制慣例をことごとく破壊せしめ、遂に財政破産の窮境に陥るに至つた経路と同じ軌道をば、國民政府もまた同一方向に辿りつゝあるものといふの

ほかない。即ち擔保の不確實な内外債に對しては、一厘の利子すらも支拂ふことなく、政費は殆んどあらゆる収入を擔保に供して濫興せる内債によつて補救しつゝある現狀である。従つて擔保が不確實なため、全然元利の支拂ひの停頓せる外債は、既にいまや十三億數千圓の巨額に達するに至り、更に元利支拂の延滞せる内債をも總計せんか、いまや三十億圓を超ゆる勢である。これに對して、現に償還中に屬する内債は十四億五千萬圓に達するのであつて、昨年未までに支那中央政府の發行した内債は左のごとくである。

支那政府内債一覽表 (一九三六年一月一日現在)

名稱	發行期	發行額	現存額	利率	擔保	完済期
(財政部發行)	年月	元	元			
七年長期	一九二八、五	五〇,〇〇〇,〇〇〇	一九,八〇〇,〇〇〇	年六厘	賠償金露國分	一九四三年
九年賑災	一九二一、一	二,一六八,四七五	一,六二〇,三〇〇	年七厘	不確	一九三三年
整理六厘	一九二二、五	四〇,三九三,三三八	三三,六五三,三七〇	年六厘	公債整理基金	一九四七年
整理七厘	一九二二、六	一三,六〇〇,〇〇〇	八,一六〇,〇〇〇	年六厘	不確	一九四七年
元整理	一九二二、六	三,一五〇,〇〇〇	三,一五〇,〇〇〇	年六厘	不確	一九三六年

名稱	發行期	發行額	現存額	利率	擔保	完済期
八年整理	一九二二、六	一,二一〇,〇〇〇	一,二一〇,〇〇〇	年七厘	不確	一九三三年
一、四庫公債	一九二二、一	一四,〇〇〇,〇〇〇	三,五〇〇,〇〇〇	年八厘	鹽稅關稅剩餘	一九三二年
九、六庫公債	一九二二、二	五六,九六一,五〇〇	五六,九六一,五〇〇	年六厘	公債整理基金	一九四八年
春、節庫券	一九二六、一	八,〇〇〇,〇〇〇	八,〇〇〇,〇〇〇	年六厘	賠償金獨逸分	一九三九年
治、安庫券	一九二六、五	二,〇〇〇,〇〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇	年六厘	賠償金獨逸分	一九三二年
秋、節庫券	一九二六、九	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	年六厘	公債整理基金	一九三二年
二、四庫公債	一九二六、十二	二,〇〇〇,〇〇〇	一,四四四,〇〇〇	年六厘	賠償金獨逸分	一九三二年
軍需公債	一九二八、五	一〇,〇〇〇,〇〇〇	五,一六二,〇〇〇	年六厘	印花稅	一九三六年
十七年前後	一九二八、七	三六,〇〇〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇,〇〇〇	年六厘	關稅剩餘	一九三三年
十七年賑災	一九二九、一	一〇,〇〇〇,〇〇〇	五,三〇〇,〇〇〇	年六厘	關稅剩餘	一九三三年
十七年金長	一九二九、二	四五,〇〇〇,〇〇〇	四〇,五〇〇,〇〇〇	年六厘	關稅剩餘	一九三三年
十七年裁兵	一九二九、二	五〇,〇〇〇,〇〇〇	二七,五〇〇,〇〇〇	年六厘	關稅剩餘	一九三三年
十八年海河	一九二九、四	四,〇〇〇,〇〇〇	一,四〇〇,〇〇〇	年八厘	海河工程稅	一九三七年
十八年通稅	一九二九、六	四〇,〇〇〇,〇〇〇	八,一六一,五〇〇	年五厘	關稅增收	一九三七年
十八年關稅	一九二九、九	七〇,〇〇〇,〇〇〇	五八,五四〇,〇〇〇	年五厘	關稅增收	一九三七年
十九年關稅	一九三〇、一	一〇,〇〇〇,〇〇〇	二,二八〇,〇〇〇	年五厘	關稅增收	一九三九年
十九年關稅	一九三〇、九	八〇,〇〇〇,〇〇〇	三三,六〇〇,〇〇〇	年五厘	關稅增收	一九三九年
十九年前後	一九三〇、十	五〇,〇〇〇,〇〇〇	二六,一六〇,〇〇〇	年五厘	關稅增收	一九三九年
二十年捲菸	一九三二、一	六〇,〇〇〇,〇〇〇	三六,〇七〇,〇〇〇	年五厘	捲菸稅	一九四一年

二十年關稅	一九二、四	八〇,〇〇〇,〇〇〇	五六,九〇〇,〇〇〇	月五厘	關稅增收	一九四五年
二十年統稅	一九二、六	八〇,〇〇〇,〇〇〇	五七,一〇〇,〇〇〇	月五厘	捲菸稅、棉紗稅	一九四一年
二十年鹽稅	一九二、八	八〇,〇〇〇,〇〇〇	五八,九〇〇,〇〇〇	月五厘	鹽稅增收	一九四二年
江浙絲業公債	一九二、八	六,〇〇〇,〇〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇	年六厘	鹽稅附加稅	一九四三年
二十年賑災	一九二、九	五〇,〇〇〇,〇〇〇	二四,〇〇〇,〇〇〇	年六厘	賠償金獨逸分	一九四四年
二十年金債	一九三、一	一〇,〇〇〇,〇〇〇	七,〇〇〇,〇〇〇	年六厘	關稅附加稅	一九四一年
二十二年愛國	一九三、三	一〇,〇〇〇,〇〇〇	五,一二五,七六九、六	月五厘	關稅收入	一九四六年
二十二年關稅	一九三、三	一〇,〇〇〇,〇〇〇	八六,五〇〇,〇〇〇	月五厘	關稅附加稅	一九四六年
華北救濟戰區	一九三、三	四,〇〇〇,〇〇〇	二,五〇〇,〇〇〇	年六厘	關稅附加稅	一九四〇年
二十三年關稅(庫券)	一九三、四	四,〇〇〇,〇〇〇	三六,〇〇〇,〇〇〇	月五厘	關稅收入	一九四〇年
意庚款憑證	一九三、四	四,〇〇〇,〇〇〇	三六,〇〇〇,〇〇〇	月五厘	關稅收入	一九四〇年
二十三年玉萍鐵路	一九三、四	三,〇〇〇,〇〇〇	一,五〇〇,〇〇〇	年六厘	關稅收入	一九四五年
俄庚款憑證	一九三、五	三,〇〇〇,〇〇〇	一,五〇〇,〇〇〇	年六厘	關稅收入	一九四五年
二十四年金債	一九三、五	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	九六,〇〇〇,〇〇〇	年六厘	關稅收入	一九四五年
二十三年關稅公債	一九三、五	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	九六,〇〇〇,〇〇〇	年六厘	關稅收入	一九四五年
廿四年四川前後	一九三、五	七〇,〇〇〇,〇〇〇	七〇,〇〇〇,〇〇〇	年六厘	關稅收入	一九四四年
整理四川金融	一九三、五	三〇,〇〇〇,〇〇〇	二七,九九九,八九七、五	年六厘	關稅收入	一九四〇年
廿四年水災工賑	一九三、五	一〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇,〇〇〇	年六厘	關稅收入	一九四七年
合計		一,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇			

(鐵道部發行)	一九三、四	五,〇〇〇,〇〇〇	五,〇〇〇,〇〇〇	年八厘		一九三四年
滬海八厘借款	一九三、四	一,〇〇〇,〇〇〇	九〇〇,〇〇〇	年八厘		一九四一年
津浦鐵路	一九三、五	一〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇,〇〇〇	年二厘		一九四四年
收回粵漢路	一九三、五	一〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇,〇〇〇	年六厘		一九四二年
一期鐵路建設	一九三、五	三六,〇〇〇,〇〇〇	三六,〇〇〇,〇〇〇			
合計		三六,〇〇〇,〇〇〇	三六,〇〇〇,〇〇〇			
(建設委員會發行)	一九三、〇	一,五〇〇,〇〇〇	九七五,〇〇〇	年六厘		一九四四年
電氣長期公債	一九三、〇	一,五〇〇,〇〇〇	九七五,〇〇〇	年六厘		一九四四年
電氣短期公債	一九三、〇	二,五〇〇,〇〇〇	七五〇,〇〇〇	年八厘		一九三七年
續發電氣公債	一九三、七	六,〇〇〇,〇〇〇	五,四〇〇,〇〇〇	年六厘		一九四八年
合計		一〇,〇〇〇,〇〇〇	七,一七五,〇〇〇			
(交通部發行)	一九三、七	八,〇〇〇,〇〇〇	八,〇〇〇,〇〇〇	年八厘		一九三五年
交通部借換券	一九三、七	八,〇〇〇,〇〇〇	八,〇〇〇,〇〇〇	年八厘		一九三五年
廿四年電政	一九三、七	一〇,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	年六厘		一九四三年
合計		一八,〇〇〇,〇〇〇	一七,〇〇〇,〇〇〇			
總計		一,一七三,〇〇〇,〇〇〇	一,一三〇,〇〇〇,〇〇〇			

註(2)二期鐵路建設 未定 一〇〇,〇〇〇,〇〇〇 未定 一〇〇,〇〇〇,〇〇〇

註(1) 民國二十三年關稅國庫證券の回收燒棄分五千萬元の減債基金及關稅收入を以て擔保となす。
註(2) 第二期鐵路建設公債一億二千萬元發行案は去る一月二十一日行政院會議を通過、中央政治會議に廻付された。

即ち南京の國民政府は、設立以來八年間に約十四億元の新借款を起債したのであつて、それがことごとく内國債たるに至つては、國民政府の占めた地盤が支那經濟の中樞たる江浙の地であつたがためであることを思はざるを得ない。しかしながら支那の債券應募者は決して國家公共の義務に驅られてこれに應ずるものではなく、償還基金が確實安全で高利且つ短期で、殆んど理想的なる利殖が出来るからである。上表内債基金の八九割までが殆んど關稅收入であるのも、同收入が國家生存の唯一の世襲財産ともいふべきものであるからである。それにこの基金は上海銀行公會内に設けられてゐる債券基金保管委員會なるものが保管してゐるのであるから、先づその償還は確實であると見てよい。その上、利子は六分乃至八分の高利であるのみならず、發行價格は表面九二乃至一〇〇となつてゐるけれども、實際は九〇以上のもの全然なく、多くは七〇乃至八〇内外であるから、應募者たるいはゆる浙江財閥の利得するところは極めて大なりといはねばなら

ぬ。かくのごとくにして、國民政府の財政が支持せられてゐるのであつて、露骨にいへば、國民政府と浙江財閥なるものが相互依存關係に立つて、政局が保持せられてゐるものである。擔保が不確實であるとの故を以て、巨額の内外債元利の支拂が全然顧みらるゝことなくして、新たに高利短期の公債が濫興せられ、優先的に償還せられてゐるのは、まことに亂暴の極である。従つて關稅收入中から支拂はねばならぬ内外債だけでも今や相當巨額に及ぶものといはねばならぬ。これに對して、關稅收入は近年貿易が輸出入とも激減してゐるため、これに依つてこの内外債の元利が償還せられ得るや否やがすでに問題である。それに現中央政府の歳入で、相當の額に上るべくや、確實な收入と見做されてゐる鹽稅、捲烟統稅、印花稅及び統稅などは、すべていづれも上掲の内債表に示せるごとく、公債の擔保に供せられてをり、もはや殆んど餘裕なく、それに中央政府の最も重大な財源である關稅收入に於て、全收入を擧げて内外債元利の支拂ひに充てねばならぬ現状では、もはや公債の發行も殆んど行詰つたものといはざるを得ない。

第四節 行詰れる財政と公債の借換

以上述ぶるがごとく現國民政府は、過去八ヶ年間に亘り、殆んど公債の種類性質の如何を顧ることなくして濫興し、いまや多少たりとも確實なる収入と見做され得るものは、全部擧げてこれを公債の元利支拂の擔保に提供するに至り、かくして財政上の根本要求たる、一財政期間の經常歳出を填補するには、經常歳入を以てすべしとの原則を根本から破壊するに至つたため、遂にその當然の結果として、こゝにその財政の基礎を殆んど崩壊せしむるに至つたのである。會て中世の歐洲に在つても、財政が全く無秩序であつたため、勢ひ公債収入を臨時費のみでなく、經常費にも充當し、公債募集の原因は、むしろ眼前に迫つた紊亂を彌縫するだけのためであり、その結果、各種の信用證券が市場に溢れて流動公債をなし、ために一國の經濟を破綻せしめたものであるが、現在の支那の公債政策も全く如上の中世時代に彷彿せるものがある。たゞ支那の内債は概して短期であり利廻りが三割以上にも上り、この上もない投資物件であると同時に、元利の償還もこれまで曲りなりながらも履行され來つたため、とにかく應募者があり、相當市場價格を維持し來つたものであるが、近年のごとくに政府の毎月収入不足が依然として公債によつて補救するの外なく、しかも、もはや公債の元利支拂に供すべき確實なる財源が存在しなくなつては、早

晩一大破綻を暴露せざるを得ないものといはねばならぬ。

於是乎、遂に國民政府は、内國債の長期借換並に新規公債の發行を企圖し、(一)現存内國債十億六千萬元は來る五月末迄の四ヶ月以内に新規統一公債(年六分据置償還期限十二年、十五年、十七年、二十一年、二十四年)に借換へること、(二)現存内國債中の次の三種は借換より除外すること、(A)短期善後公債(本公債は本年三月全額償還の豫定)(B)十七年金融長期公債(新統一公債より低利のため)(C)河北省海河公債(關稅附加稅を擔保とせるため)、(三)内國債の強制的長期借換により元利負擔年額に餘力を生ずるので新に復興公債(年利六分二十四年内償還)を發行することを決定したのである。本計畫の借換が強制的であるの故を以て、一部の論者は、その結果、國民の國債に對する信用を失墜せしめ、市價を低落せしめることは不可避であつて、從て今後續發を豫想される赤字公債は何れも大部分中央、中國、交通の三政府銀行の背負込みとなり、かくして結局紙幣インフレを激成せしむるに相違ないと主張してゐるが、しかし元來支那の新式銀行は公債投資の外資金運用の途なく、しかもこれ位有利な事業は全く他に類例が存しないのであるから、多少利子が低下し償還期限が延期されたからといつて、今後新に公債に應募し

ないといふが如きことはあるまい。それに一體、強制借換は今度が初めてではなく、既に數年前にも行つたことがあるのであつて、支那財政の組み立てとその沿革とから見て、さまで重大視すべきことゝは思はれないのである。これによつて政府は少なからぬ元利の負擔年額を輕減し得るから、こゝに國民政府財政の當分の延命策が立てられたものといふべきである。しかしそれかといつて、もとよりこれによつて財政の根本が改善されたのでは決してなく、むしろ結局に於ては却て益々破局の彼方へと押し進めてゐるものであることは、言ふまでもないところである。従ていつかは外國の積極的な助力を藉らねばならぬ時期が到來することは疑なきところである。さればわが國としても、事態の推移を究め、今よりこれが對策を樹立することは、支那に對する最大の債權國としても、特に緊要の措置といはざるを得ない。

第十五章 支那の金融恐慌と新幣制

第一節 恐慌下の支那

國內に於ては、矛盾に満ちた封建的生產關係を基底にもちつゝ、一方には列國資本の重壓の影響下に、今や「農業國支那」は、極端なる恐慌の渦に投げこまれて、その脱出に必死である。總ての分野に於ける不統一・混亂・無秩序をその常態とするかの如く見られ來つた支那が、最近その必然的要求に従ひ、次第に、中央集權的經濟工作に力を入れるやうになつて來た事實は、過去の支那を知る者のまことに瞠目に値する傾向といはざるをえない。その最も顯著な部門は、米國銀政策強行の影響に開始した金融統制工作である。もとより、封建的政治形態を脱しない支那としては、國民政府の統制工作が果してどの程度まで奏功しうるものか多大の疑なきをえないところであるが、少くとも國民政府勢力區域たる中支諸方面に於ては次第にその機運が完成せられてゆくものと見ざるをえない。

一九二九年十月の米國取引所恐慌を導火線として世界經濟は深刻なる恐慌の中に捲きこまれるに至り先づ一般商品の暴落が急激に起つた。しかし、商品「銀」の價格低落は、却つて支那經濟には好影響を齎らし、世界的經濟不況より免れしめたのであつた。即ち銀價の下落は、支那の對外輸出貿易の促進を刺戟し、國內産業を外國の競争から保護することを可能ならしめた。

支那對外貿易總額（單位千元）

年次	純輸入	純輸出	合計	入超
一九二九年	一、七三三、〇八三	一、五八三、四〇〇	三、五五五、五二四	三八九、六四二
一九三〇年	二、〇四〇、五九九	一、三九四、一六六	三、四三四、七六五	六四六、四三三
一九三一年	二、三三三、三六七	一、四一六、九六二	三、六五〇、三三九	八一六、四三三
一九三二年	一、六三四、七三六	七六七、五三五	三、四〇二、二六一	八六七、一九〇
一九三三年	一、三四五、五六七	六一一、八二七	一、九五七、三九五	七三三、七三九
一九三四年	一、〇二九、六六五	五三五、二二四	一、五八四、八七九	四九四、四五一

銀貨たる支那ドルの對外爲替相場は急激に低下したから、支那の對外購買力に制限を與へたもの、支那の輸出は著しく有利となり一九三一年まで支那の輸出貿易は、世界諸國の甚しい輸出不

振を尻目に、大體順調を以て増進しつゝあつたものなることが判明するのである。

と言つて別に支那の經濟状態が特別改善されたわけでは勿論ないが、世界各國の物價の低落に憚んでゐる時、獨り支那だけが物價は寧ろ上向を示してゐたことは銀安により或程度まで支那經濟が保護されたのである。

主要國卸賣物價指數（支那は一九二六年＝100）
（他は一九一三年＝100）

	米 國	英 國	日 本	支 那
一九二七年平均	一三六・七	一四一・六	一六九・八	103・4
一九二八年同	一三八・五	140・3	一七〇・八	101・7
一九二九年同	一三六・五	一三六・五	一六六・一	104・5
一九三〇年同	一三三・八	一二九・五	一三三・八	一二四・八
一九三一年同	104・6	104・1	一二五・六	一二六・七

しかるに一方、列國資本主義のダンピングブラツツたる役割をふり當てられてゐる支那は、必然的に輸入貿易の急増を防ぎえなかつた。ために入超は漸増の傾向を辿り、その決済のため銀の流出は當然に起らざるをえない状態にあつた。

更に、一九三一年のイギリスの金本位停止を契機とする諸外國の本位貨恐慌、低爲替戦は、支那の經濟情勢を一變させ、これまで支那の有してゐた低爲替の利益は消滅したのみならず、米國に於ける銀買上策の結果、支那の貨幣の對外價値の極端なる昂騰が起るに至つた。即ち次表の如く、一九三一年に最低値に陥落した銀價は一九三二年以來反撥して漸騰傾向を示した（一オンスに付）。

年次	倫敦(片)	紐育(仙)	年次	倫敦(片)	紐育(仙)
一九一九	五七〇・七七	一一一・二六	一九二三	三二〇・九二	六四〇・八九
一九二七	三六〇・三四	五六・七一	一九二九	三四〇・四五	五三〇・九四
一九三〇	一七〇・六二	三八〇・四四	一九三一	一四〇・五九	三八〇・六四
一九三二	一七〇・八一	二七〇・九〇	一九三三	一八〇・四四	三四〇・七三
一九三四	二二〇・三九	四七〇・七三	*一九三五	三二〇・八七	七三〇・八七

*一九三五年六月十七日の相場。

尙最も關係深き日英米との爲替相場を示すと次の如き變化を見せてゐる。

上海市場對外爲替 (電信爲替相場)

	一九三一年	一九三三年	一九三四年
ロンドン宛 (一元に付シリング)	〇/二二〇・九五	一/二八・八	一/四〇・四二
横濱宛 (百元に付圓)	四五・三四	一〇〇・七	一一三・五五
ニューヨーク宛 (百元に付弗)	二二・二八	三六・〇五	三三・九二

銀價のかゝる昂騰は、支那の對外爲替相場を騰貴せしめ、また銀價の先行高を見越しての銀塊流出が始まり、更に國內的にも物價の低落、工業の不振、農村經濟の破綻を結果し、金融界に於ては金利の昂騰による金融梗塞を招き、金融業者及び商工業者の破産倒壊が引續いて起つた。銀價の騰貴は、銀貨國たる支那の購買力を刺戟し、世界貿易額の増加を齎らし、延いて世界恐慌撃退に有力であるといふのが、嘗ての銀論者の意見であつた。例へば、アインチヒは次の如く述べてゐる。

『過去數年間にわたる銀價下落の結果、支那・印度その他の東洋諸國に於ける購買力は激しく減退した。これら諸國の住民の必需品は大したものではないが、この莫大な人口は世界的消費の重要な要素をなしてをり、その購買力の減少は商品の全需要額に影響せずにはゐないのである』

銀價の恢復は、しかし眞實に支那のためを思つて唱へられたものではなかつた。現在の世界恐慌脱出のためには、資本主義諸國は、植民地または半植民地諸國の犠牲に頼らねばならぬ。銀の騰貴は支那へ悪影響こそ齎らしたれ、好結果は齎らしえなかつたのは當然である。

註(1) 貸付利率(洋折)は、資本流通市場に於ける氣象臺である。流通の緩慢時に於ては利率低下し、反對の場合には騰貴する。その昂騰が常態を越す時は、それは恐慌となるのである。上海に於ける利子の變遷を見るに次の如くである。

民國二十年十月に、六錢といふ從來に於ける最高記録を示したが、翌二十一年には上海事變勃發の結果金利激騰し、前年の六錢を超えて七錢に達したが、戰爭停止と共に下降し初め、同年十月以降は五分に低落した。二十二年に於ては大體最高は一角で低いものに至つては只で借り出すことさへ出来た。年末に至り、金融切迫のため二角に上昇した。翌二十三年に於ては上半期は大體安定してゐたのであるが、八月には一角五分、九月には一角六分と上騰し、十一月以降は現銀の流出と年末の金融切迫と秋の收穫期であるためにより内地の現銀需要大いに増大し、急激な騰貴を齎した。更に一昨年度上海貸付市場の變動を詳細に示すと次の通りである。

一九三四年第一・四半期	最高	〇・〇九	最低	〇・〇〇
第二・四半期	最高	〇・〇九	最低	〇・〇二

第三・四半期	〇・一六	〇・〇四	
第四・四半期	十月	〇・一四	〇・〇九
	十一月	〇・四〇	〇・一〇
	十二月	〇・六〇	〇・二三
一九三五年一月(十五日止)	〇・五五	〇・二一	
一九三四年一月	〇・〇九	〇・〇二	
一九三三年一月	〇・〇五	〇・〇〇	

銀の巨額の流出は金融の梗塞を齎し、金融の梗塞は更に銀高、爲替高によつて都市經濟に大打撃を與へ、小銀行所謂錢莊の破産、倒壊、多數の中小企業の倒産、金利の高騰を招來し金融恐慌を激化せしめたのである。かくして一昨年五月二十三日天津の中魯銀行支店明華銀行は閉鎖し、中國實業銀行支店に緩慢な取付が勃發し、續いて二十四日には上海に於て美豐銀行(アメリカン・オリエンタル・バンキング・コーポレーション)並びに普益商會の休業により、上海金融界は大動搖を來し、金融は極度に逼迫し、各銀行は最後の手段として現銀との兌換停止を強行するに至り、ために紙幣不安が増大した。また、地方に於ては錢莊發行の莊票に對する不安は時々刻々深

刻化し、危機に直面するに至つたため、その影響の甚大なるを慮り錢莊者救済を目標とし、政府は中央、中國、交通の三銀行を通じて二千萬元の應急融資を決定した。これより一時曲りなりにも小康を得たが、僅か二千萬元の貸付金の如きは俗に言ふ燒石に水の感ありといはざるを得なかつた。

第二節 米國銀政策と支那の銀流出

支那における金融恐慌の直接的動因となり、經濟恐慌の激化に大なる役割を演じた銀の流出は米國に於ける銀價の人為的吊上政策に基礎を置いてゐるのである。今説述の順序として銀政策についてその歴史的變遷を一應簡單に述べて見るに次の如くである。

歐洲大戰以來慢性的低落の歩調を辿つてゐた銀價は、一九二九年世界恐慌の勃發以來急激に低落したのである。世界の有力銀市場たるロンドンの銀塊相場は一九二五年平均三二二ペンス〇九（一オンス建）から、世界恐慌直前の一九二七年平均は二五ペンス三と低落したが、更に恐慌以來急落し、一九三〇年平均は一七ペンス六二となり、一九三一年二月九日遂に十二ペンス丁度と

いふ銀史上未曾有の安値を現出したのである。同年九月英國の金本位が停止されてからは、ロンドンの相場は多少反騰を示したが、他方今一つの有力市場たるニューヨークでは依然下落を続け、一九三二年十二月には一オンス二四セント四分の一といふ安値を出してゐる。これを一九二五年の高値七二セント八分の三に比較すると實に三分の一にしか相當しない激落振りである。上述の如き銀價の異常な暴落は、銀産國たるメキシコ、米國、カナダ等は非常な打撃を受けると共にここにシルヴァ・メンの活躍の舞臺が供せられるに至り、他方銀貨國たる支那の購買力の激減は、既にデフレーション過程に入つた列國の對外貿易衰退に一層拍車をかけるに至つた結果、銀生産の壓倒的支配者であり、銀價格に最大の利害關係を有する銀産業者を多數に包含する米國は、彼等の保護、延いては國內經濟の恢復、世界經濟整調を目指して、銀價安定對策のため指導的役割を演ずるに至つたのである。

かくて一九三一年頃から米國の銀運動は白熱化し、一九三三年倫敦銀協定を締結し、次いで一九三四年六月には米國銀買上法並びに米國銀輸出禁止令、更に同年八月には銀國有令を發して銀價引上政策を確定的な地盤の上に築き上げたのである。²⁾

註(2) 米國に於ける最近の華々しき銀政策の基調は一九三三年の農村救済法トーマス修正條項に置かれてある。従つてこのトーマス・アmendメントは米國銀政策の母體であると言ひ得られる。これより生誕したものが同年七月の倫敦國際銀協定で、その最も重要な規定である第二條を参考のために擧げて見ると、曰く「アメリカ政府は濠洲、カナダ、メキシコ、ペルー政府と同様、協定の存続期間中、銀の賣却を一切行はず、一九三四年以降四ヶ年間國內銀山産出銀を買入れ、又は他の取極めにより、市場よりの引揚げを行ひ、それらの總量を各國合計にて毎年三千五百萬オンスに達せしむ。」となつて居り、この規定が基になつて、一九三三年十二月二十一日に國內新産銀買入に關する大統領令が布告されたのである。

かくて米國政府の國內新産銀買入價格は次の如く改訂され引き揚げられていつたのである。

一九三三年十二月二十一日

一九三五年四月十日

一九三五年四月二十四日

六四・五〇仙

七一・〇〇〇

七七・五七七

一九三三年の六四仙五〇の買上價格は、法定銀價格たる一オンス一弗二九仙から鑄造費として半額を差引かれたものである。當時の市價は四四仙位であつたから銀鑛所有者は少なからざる利益を保證された譯である。次いで一昨年六月政府は秋に於ける總選舉を前にしてシルヴァ・メン

に迎合するため銀買上を制定したのである。この銀立法によれば、通貨金屬準備の二割五分を銀とする、即ち將來金三に對し銀一の割合となる迄、政府は内外市場から買ふことが出来、また政府はこの銀塊及び標準銀弗を準備に銀證券を發行することも出来るのである。

この法律の制定のために米國政府は今後多量の銀を買ふであらうとの豫想が生れ、銀價を世界的に沸騰せしめたのである。その他にも種々の原因が存在するであらうが、何といつてもこの一九三四年の銀立法の儼存が最大の強氣材料となつたのである。即ち通貨の二割五分を銀とするためには當時の金保有高七十七億五千七百萬弗に對し、銀一オンス一弗二十九セントとしても約二十億二百萬オンスの銀が必要であつた。當時財務省は六億九千萬オンスの銀を保有してゐたから、殘額十三億三百萬オンスを將來蓄積する必要があつたのである。

アメリカ銀論者の根本主張は銀高により東洋諸國の購買力は昂まる、といふにあつた。が事實は増進する筈の輸入も支那奥地農村の極度の疲弊のため少しも増加しない許りでなく大減少を示した。奥地疲弊の結果は更に銀の都市集中上海在銀高の激増を招來した。

上海在銀高 (單位千元)

日滿支經濟論

三〇四

一九二八年	一八六、九五	一九二九年	二六七、一九三
一九三〇年	二七五、九二四	一九三一年	二五一、〇七二
一九三二年	四三六、三三九	一九三三年	五四七、四四七
一九三四年	三三四、九七七	一九三五年一月	三三五、〇八〇
同 二月	三三三、七〇〇	同 三月	三三四、一九九

他面ロンドン、ニューヨークに於ける銀相場暴騰は、支那からの銀の海外大流出を生ぜしめた。

支那の銀流出入高（單位千元）

	輸 入	輸 出	出 超
一九三二年	九六、九六三	一〇八、四三八	一一、四四四
一九三三年	八〇、一八〇	九四、三〇二	一四、一三三
一九三四年	七、四二三	二六七、三五四	二五九、九三一

即ち一九三二年には出超は僅か千萬弗餘に過ぎなかつたものが、一昨年中に於ては實に二億六千七百萬弗に達する巨額の銀が支那から流出逃避してゐるのである。

かくの如き國內在銀の流出は各地の銀準備を激減に導き、流通銀行券に對する銀準備の減少は

支那の金融組織維持を困難ならしめた。

上海華外銀行の銀準備率百分比

	支那銀行	外國銀行
一九三四年一月	五〇・八一	四九・一九
同 十月	七五・三〇	二四・七〇
同 十二月	八三・七三	一六・二七
一九三五年一月九日	八二・七三	一七・二七

右統計によつて現銀流出の巨大なる部分が外國銀行の扱ひであることを看取し得る。多量の銀の海外流出は必然的に支那に於けるデフレーション現象を顯著ならしめ、その隨伴作用である信用機能の梗塞を齎し、かくて支那の弊制並びに金融全般を恐慌に陥入れたのである。

かくの如くして若し對外貿易が改善されず、流出した銀が永遠に再歸しなかつたならば、近き將來に於て支那は紙幣本位の窮境に陥らざるを得なかつたのである。従て上述し來つた如き銀流出に對して支那政府は各種の對策を以てこれが防止に狂奔し、支那金融狀勢の緩和に懸命の努力を爲したのである。今國民政府が從來取り來つた各種對策を跡附けて見ると、最初のものは一昨

年八月の蘆山會議である。この當時は銀流出の持続性とその影響とに就て一般の認識が未だ切實でなかつたため對策の決定を見ずに終つたのである。然るに事態は次第に急迫を告げるに至つたため、政府は昨年九月九日先づ爲替市場の抑壓を企て、外國爲替賣買の制限と企業交易所に於ける外貨決済の禁止を行ひ、更に十月十四日には銀輸出税の引上(二分五厘より一割)と平衡税の設置(國外銀價が國內銀價よりも高い場合、内外銀價の差だけ課税して國內銀の流出を防止せんとするものである)をなし、進んで十月十九日には中央、中國、交通の三發券銀行を糾合し資金一億元を以て爲替平衡委員會を作り、十一月二十二日銀密輸の取締り勵行を命令し、また現銀移出護照制の強行をなすなど慘憺たる苦心を拂つたものである。

然るに此等の諸對策は獨り銀の流出を徹底的に阻止し、同時に支那經濟、金融の苦痛を緩和するに役立たなかつたのである。外國銀行、外人ブローカーの存在は各種對策の効果を減殺し、或は逆に支那自體を苦境に導く結果となるものであつた。例へば爲替賣買の抑壓の如き、治外法權を有する外國銀行、外人ブローカーに對しては全く拘束力なく、單に支那側錢莊を窮境に陥れたに止まつた。

こゝに於て支那政府は昨年四月、米國の銀買上値が引上げられ上海銀の流出が再び猛烈となつた時、在上海の諸外國銀行に銀流出防止方に關し所謂モイラル・サポートを懇請したのである。その結果外國銀行も支那政府の自國通貨制度維持方針——健全通貨政策を維持するため自發的に當分銀の積出を停止することゝなつた。

世界經濟恐慌發生以來資本主義諸國は金輸出再禁止、平價切下、爲替管理、貨幣準備の集中、關税の引上、輸入割當制度實施等の諸對策を採用した。しかし銀本位國支那に在つては、通貨並に兌換券の發行制度も極めて不統一であり、また銀の集中並に銀退藏の防止も到底期することが出来ないのである。こゝに支那經濟體制に内在する矛盾が存在するのである。

支那の銀流出の原因について一般に誤解せられてゐる點は、一般に支那の銀海外流出の原因はアメリカの銀政策にのみ存するやうに觀察せられて居ることであるが、事實は決してさうではない。その根本的原因是支那經濟の内部に存するのであつて、アメリカの銀政策は、支那の銀流出に契機を作り拍車をかけるに至つた直接的動因たるに止まり、その根本的原因ではないのである。即ち一方に於ては、支那市場と密接な經濟關係にある英國、日本、米國の金本位離脱によつ

て支那の銀ドル貨は外貨に對して漸騰し、加ふるに銀價の奔騰も手傳つてその對外價値を一層騰貴させ、その結果輸出を不利に導き貿易のバランスを悪化せしめたことがその原因の一である。他方に於て、貿易入超尻決済上重要な役割を演ずる華僑の送金が激減し、また外國からの新資本の流入も減退し、舊貸付や投資が回収されて、勢ひ銀流出は多くなつたのである。かくの如くして支那は假令アメリカの銀政策が行はれなくとも國際收支の悪化のために、巨額の銀流出を避けることが出来ない運命に置かれてゐたのである。

第三節 國民政府の金融統制工作

支那の金融恐慌發生の直接の原因は、外國の國內的經濟政策に影響せられたものであつたから、對外的交渉の最も多い開港場に於て特にその様相が激化したのであつて、この事實は殊に上海についてははねばならぬ。中國銀行もその一九三四年度營業報告に於て

「銀問題の發生以來、上海のうけた影響は最も甚大であつて、到底地方の比較でない………」といつてゐるやうに、金融恐慌は特に上海に於て尖鋭化せしめられたのである。

而して銀問題發生以後、支那政府の採つた對策は、理論的には可成り首肯しうるものであつたにもかゝはらず、その實效は殆んど奏しなかつた。その理由は、もとより種々存するであらうが、最大の原因は、支那金融界の無統制であつた。かくて、必然的結果として現はれたものは、國民政府の金融統制工作であつた。

元來、支那の金融界には、外國金融資本の跳梁が甚しいのであるが、この列國資本の重壓の下に於て從來支那の二大國內金融系統が相剋をつゞけて來たのであつた。即ち一方は舊式金融機關たる錢莊と、他方は新式金融機關たる近代銀行とであつた。しかるに、支那國內に於ける資本主義勢力の進展の結果は遂に舊式金融機關の敗退となつて現れ、國內金權の實權は新式銀行の掌握するところとなつた。だが、この新式銀行は從來雜然たる存在であつて、中央政府の完全なる支配下におかれたものではなかつた。政府銀行として中央銀行はあるものゝ、その實力は民國銀行たる中國銀行のそれに遠く及ぶところではなかつた。その他にも交通銀行を始め數行の發券銀行が存するにもかゝはらず、殆んど獨立の組織を以て營業をつゞけ、政府の統制力はこれに及ばない憾みがあつた。錢莊壓迫に功をあげた政府は、當然の順序として、近代的銀行の統制に着手する

ことゝなつた。

折から昨年三月、政府は一億元の金融公債發行を決定したが、四月一日その發行と同時に、中央・中國・交通三行の増資を斷行し、右公債を以て増資に充て、以て中國・交通兩銀行に對する政府の持分を優越的に引上げた。蔣介石は四月三日の中華日報に於て「國民經濟建設運動」の新提唱をなし、同運動の目標が經濟産業の振興を圖るともに金融の救済をなし、苛捐雜税を廢し、更に紙幣の濫發を禁ずるにあると説き、なほ語を進めて「今日中央政府は、中央・中國・交通の三銀行資本を増加し、國民經濟の安定と農工商の進展を圖らんとするが、これは國民經濟の安定と農工商の進展を圖らんとするものであると同時に、國民經濟建設運動の一現象である」と昂然として斷言してゐる。

中國・交通二行の支配權掌握に成功した國民政府の金融制覇工作は、更に次ぎ／＼と發展をつづけて行つた。即ち五月下旬に至り、かねて種々風説のあつた中央實業銀行（發券銀行）は、青島に於けるその支店の取付に端を發し、遂に上海本店へも波及し、連日にわたり、現金兌換並に預金取付が行はれ、事態は次第に悪化し、銀行公金の救援によるも危機脱出が容易でないといは

れるに至つた。萬一同行の破綻が公然と曝露するに至れば、全發券銀行の倒壊を惹起する恐れなしとなつたので、遂に政府はその救済に乗出すことゝなつた。政府のとつた對策は、同行の公稱資本二千萬元で三百五十萬七千四百元拂込となつてゐるのを、中國銀行より公債庫券と兌換券を以て五百萬元の拂込増額をなし、これを官有株として、完全に中央銀行の統制下におくこととなつた。しかも總經理には前交通銀行總經理で當時中央銀行國庫局長の椅子にあつた胡祖同（別名胡孟嘉）氏を以てあてたのである。

かくて國民政府の金融統制は一服の間もなく、次いでやはり發券銀行の一たる四明銀行にも及んだ。即ち同行總經理孫衝甫氏は、辭職を餘儀なくさせられ、後任として中央中國兩行の政府派遣常務理事たる葉琢堂氏が就任することゝなつた。この傾向は、更に進み、六月七日、發券銀行たる中國通商銀行は株主總會を開催し、財政部が顯貽穀を總經理に派遣することを審議し、これを承認通過せしめ、舊總經理傅氏は新に常務理事に任ぜられた。

かくの如くして、中央政府の觸手は、發券銀行へと次第に延び、既に過去三ヶ月餘の期間に於て、在上海十發券銀行中五行までが政府の支配下に屬せしめられ、これに中央銀行も加ふるに於

ては在銀高二億九千五百萬元中一億九千五百萬元（約八割）及び紙幣發行高三億二千四百萬元中二億七千九百萬元（約八割六分）までが政府の直接投資下におかれることとなつたわけである。³⁾

註③ 國民政府は紙幣用紙輸入に關し、六月六日上海銀行同業組合に左の如き訓令を發し、紙幣用紙輸入に認可を必要とすることとした。これは政府の紙幣發行を統一する意圖を明瞭にしたものである。

紙幣用紙は當行に重要關係あり財政部は紙幣私發杜絶を圖る見地より爾後紙幣印刷用紙輸入の向は事前に財政部の認可を求め、然る後中央銀行信託局を通じて之を行ふべし、中央銀行信託局を通ぜずして購入せるものは發覺次第全部を押收す。

以上の如くにして、支那の金融統一傾向は日毎に顯著になり、残る發券銀行への支配權擴大は既に時期を待つのみとなつた。

然るに、從來支那金融支配の一大難點といはれ來つた在支外銀の紙幣發行の統制が見逃されてゐては、支那政府の願望は到底達せらるべくもない。處が、外國銀行は、支那に於ては治外法權に擁護せられ、その發券事務は總て各自國政府の指名に従ふのみで、支那政府からはなんら干渉をうける必要がなかつた。この問題をいかに解決するか？ 一般の關心はこの點に特に集中せられてゐたのであるが、これに對しても、國民政府は、財政部の名を以て、外交部を通じ、駐支各

國大使宛に

今後在支外國銀行は紙幣發行その他につき支那の法律に従ふべき旨各國在支銀行に命令されたし

との通牒を發し、正式に外國銀行管理の意向を表明した。

次に問題となるのは、かくして内國及び外國銀行の統制權を掌握した政府が、いかなる金融政策に出るであらうかといふ點であつたが、遂に政府は同十一月四日を期して新幣制の實施を發布したのである。

第四節 新幣制の實行性

支那の農村經濟は、こゝ十數年來、年々崩壞の過程を辿りつゝあつたのであるが、その上更に未曾有の世界恐慌の襲來を受け、加ふるに又合衆國の人爲的な銀價鈞上政策の波動を眞正面より受け、ために上海を中心とする金融市場に破局的な打撃を蒙り、農村經濟の崩壞に續いて都市經濟も亦恐慌状態に陥り、壊滅の危機に臨むに至つたので、支那としては、どうしても、何等かの

非常策とも稱すべきものを採用し、この全面的破局の拾収を圖らざるべからざる状態に陥つてゐたのであつた。

右の如き實情の下に昨年十一月突如として幣制改革が行はれたのであるが、その目標とする所は大體これを二つに分け得ると思ふ。

その一つは銀流出の増大に伴つてデフレーション現象が起り、物價の低落、金利の昂騰は停止する所を知らず、甚だしい金融恐慌を來してゐたため、このデフレをインフレに導き、以て差迫つた金融危機を打開しようといふことこれである。

また他の一つは對外的に貨幣價值を大約六割三分ほど切下げその點で爲替相場の安定を圖りこれに依つて過去五ヶ年間に殆ど半減した輸出貿易の振興を圖り、極度に悪化した國際貸借を改善しようといふことである。

右の目標の第一、即ちインフレへの轉化は極めて容易であつて、現在支那銀行の保有する二億八、九千萬元の現銀で、假りに從來の規定である六割の現銀準備を基礎として紙幣を發行するとしても、彼是八億以上の發行が可能となるので、従つて新制度實施前の發行額四億に比し、倍額

となるわけである。

もとよりその實現性も、上海を中心としたその經濟圏内に於てのみ考へられる問題であつて、全国的にこれを普及せしめるためにはなほ相當の年月を要すべきことは論を俟たない。

元來管理通貨制の如きは、その國の財政機構、金融機構が中央政府に依つて完全に統制されてゐる場合に於てのみ、實行可能なものであつて、支那の場合、果してこれが可能であるか、むしろ全く不可能な、望むべからざることではなからうかと一般にも考へられ、理論的にも推論せられる。併し、支那はわが國その他諸外國に見る如き有機的な經濟組織を有する國でなく、従つて國民經濟の一部面に極端な打撃を蒙つても、それが必ずしも他の全機構を動搖せしむることゝはならず、且又、或る地域を單位とした一經濟形態内に於てのみ、特殊の經濟現象を現はすことも可能な國である。

換言すれば、支那の經濟はもとゞ、全国的經濟ではなく、地域的に分散せられた經濟形態の集合體ともいふべき經濟なのである。ゆゑに今回の改革も上海を中心とした區域内に於てのみ實現性があるわけである。

しかるに翻つて第二の目標たる爲替の安定に就て考ふるに、これは相當多額の爲替平衡資金を必要とする問題であつて、外國の實例に徴しても、英國は二億磅、合衆國は廿億弗の巨資を充ててゐるのである。もとより、右兩國の經濟と支那のそれと比較すべくもないことは明らかであるが、しかし、支那に於ても、現在の三億足らずの保有銀を以てしては、到底爲替安定の永續性が期待せらるべくもない、殊に最近のやうに合衆國の銀政策が破綻を暴露せんとするに至り、銀價の崩落を見ることになつては、勢ひ、上海市場に於ても外貨買のスペキュレーションが起つて來るに相違ないから、一層爲替相場の安定は困難とならざるを得ない道理である。

此の點に就ては最初から外國の援助がなくては成功困難とみられたところである。従つてこの外國銀行の態度如何は、支那の場合極めて重大である。何故かならば、從來上海市場に於ける外國爲替手形の賣買は、主として外國銀行の管掌するところであつて、支那銀行自身の賣買するものは比較的少なかつたのであるから、それ等外國銀行が本改革を支援しないことになれば、前途多大の不安と不便とを感ぜざるを得ないからである。併し、若し外國が進んでこの計畫に資金的援助を與へたならば、假りにロンドン銀塊相場が十七、八片まで低落することがあつても、支那の

企圖してゐる對英一志二片半の相場安定は、必ずしも困難ではなからうと思ふ。即ち、成否の根本は外國の資金供給如何に懸ること多大である。經濟機構の原始的、非有機的なことは、改革に可能性を與へるけれ共、可能性自體ははまだ決してその實現性、成功性を賦與するものではない。それを望むためには先づ資金の潤澤（これは當然、外國の援助に俟たねばならぬ）がなければならぬ。

最近の支那の經濟は冒頭にも述べたやうな状態であるから、若し最後の切札ともいふべき新制度が破綻するやうなことになるれば、それは支那經濟の全面に重大な衝撃を與へ、ひいては一大混亂に導く危険が多分にある。かくては諸國に及ぼす影響も少なからざるものがあるから、この際、各國としては、適當な機會と方法とに於て、本制度の實施を援助することが、採るべき政策ではなからうかと思ふ。

第十六章 支那の農業復興と日本

第一節 支那國民經濟と農業

近年支那の經濟狀態は極度に惡化を來し、農業商工業其他全産業部門に於いて著しい衰退の徴を現はしてゐる。之に加ふるに財政の紊亂は近來特に甚しく、従つてこれと密接な關係にある金融界も亦甚しい恐怖狀態に陥つてゐる。對外貿易の不振及び華僑經濟の没落は、支那の國際貸借をして稀に見る支拂勘定の増大を齎らし、さなきだに衰退過程を辿りつゝある支那國民經濟の破局性を擴大せしめてゐる。

斯くて今や支那の經濟恐慌は、重大なる事態を勃發せしめる可能性が充分に存してゐる。國民政府當局も、之に對し相當緊張せる態度を以て解決策の發見に苦んでゐるものゝ如く、昨年四月貴州省貴陽に於ける蔣介石の民衆に對する「國民經濟建設運動」の呼び掛けに於いても特に此の點を強調してゐる。

一體支那の經濟狀態が斯くも惡化するに至つたのは、多數の複雑せる原因が相互に結び合ひつゝ、これを誘導したものであつて、其の何れを根本原因と見るかは、極めて困難なる問題であるばかりでなく、見る人に依つても著しい相違があるであらう。

支那の一般民衆の疲弊は、さなきだにその國民經濟の進展過程に於て、封建的搾取關係がますます助成せられてゐるところへ、更にうち續く内政的混亂と天災との爲に、極度の生活難におしつめられてゐる現狀から發生したものである。即ち支那の社會制度は、ヴァルガの言ふ如く、現在なほ前資本主義的の制度から資本主義的の制度への轉換の過程を續けてゐるが、この進行過程は土着の發展ではなくして、帝國主義的資本主義の影響の下に行はれたもので、即ち資本主義への轉換は同時に、外國資本への支那の屈服を意味し、帝國主義列強の半殖民地へのその轉換を意味する社會である。それになほ封建的支配力が強大であるがため、一層封建的搾取關係が助長せられてゐるのである。その結果、今や、農村經濟の崩壊、手工業者の破産、失業の固定化が深刻化されつゝあり、殊に人口の約八割を占むる農民社會は、次の三重の搾取形態の下に極度の生活難に陥つてゐるのである。即ちそれは超經濟的な小作關係であつて、これは、豪紳、高利貸及び軍閥の

三階級によつて行はれてゐる。即ち支那の地主階級は小作人の労働の代償として賃金を支拂ふものではなく、土地生産の五〇パーセント乃至七〇パーセントを自己の収入となす外、更に小作人に對して必要な場合各種の力役を命ずるものである。それに地主はまた軍閥を利用して租税の中間搾取をなすのが一般の例である。支那の軍閥官僚制度は完全に封建制度の上にうち建てられてゐるのであつて、彼等は一つの地盤或は機關を占據した場合には、理由なき徴税と力役を強制的に行ふのであつて、この場合に地主階級の中間搾取が行はれるのである。次には農民と高利貸との關係であつて、高利貸資本は支那に於ては極めて大なる勢力を有し、その運用は普遍的になされてゐる。農民階級は信用が極めて低いため、農産物收穫前に次の生産を行ふ場合に、こゝに資金の融通を必要とするのであるが、これには收穫前の農産物を廉價に賣約するか、或は二割以上の高利に依つて融通を受けるかの外ない。これ等三重の搾取形態は何れも農民の生活費を極度に削減しつゝあるのであつて、斯くして窮乏化せる支那の農村經濟に對して、うち續く内亂と天災とに加へ、深刻なる世界恐慌の大波動が襲來したのであるから、その結果今や支那の農村に於て最も顯著に見られる現象は、農民の土地分離と匪賊化であつて、これに續いて土地の荒廢と農業

生産の減退とが擧げられる。しかも斯くして破産に瀕せる農民階級は、工業資本の發展しないため都會に生活の途を求めるところも出來ず、それだからとて外國輸入品の壓迫のために家内工業にも従事し得ない窮境に立つてゐるのである。

支那國民經濟の全般を發見するに、支那は今尙純然たる農業國であることが分るのであつて、農業は支那國民經濟の根幹を爲し、農業の盛衰は國民經濟の興廢に支配的な作用を及ぼすのである。従つて若し農業が比較的順調である場合には、假りに他の部門に於ける不振状態が表はれても、全面的に支那經濟に打撃を與ふるには至らない譯である。依つて現恐慌の廣がり及び深さを知り、其の實相を完全に把握せんとせば、先づ支那の農業經濟の實狀を究明しなければなるまい。

第二節 農業衰頹の原因

以上の如く、支那國民經濟に於ける農業の地位は、極めて重大であるが、此の重要地位にある農業は、以上述べた如くにして極度の疲弊に陥り、其の崩壞過程を極めて顯著に現はしてゐる。今其の崩壞原因の主要なるものを更に列舉して見るに、次の如くである。

第一世界恐慌の影響 一九二九年秋以來、世界の資本主義國は、嘗てなき深刻な經濟恐慌に捲き込まれるに至つたが、斯かる資本主義諸國の經濟恐慌は、微弱乍らも世界經濟構成の一員となつてゐる支那の經濟に對しても、少なからぬ影響を與へたのである。此の影響は二つの點から與へられた。一は各國購買力激減の結果、原料品輸出國たる支那の對外貿易の減退を惹起せしめた點から、二は各國が同國經濟の復興を策して、輸出強化を斷行し、其の對象として支那を選んだと云ふ點からである。

第二災害の頻發 支那は古來災害の國と言はれる程であるが、殊に近來は森林の濫伐、排水、灌漑施設の不完全等に依る水害や、全國的旱害及び蟲害等の頻發は、農民生活を根柢から破壊してゐる。

第三租稅負擔の重壓 古來支那の政治が極端な重農政策を執つて來たことは、反面農民の租稅負擔を著しく増大せしめる結果となつてゐたものであるが、特に近年は軍閥政治の惡影響治の結果として、世界に類例なき租稅負擔の重壓を農民に加へてゐる。正稅の増加は比較的少ないけれども、一方附加稅に於いて極度の濫徵が加へられ、之また農民生活の根柢を脅かしてゐる。

第四小作料負擔の過大 支那に於いては小作農及び雇農の數極めて多く、農村社會構成中約半數を占めてゐる。更に小作農及び小作兼自作農の合計は六八%を占めて居り、しかも小作農は年々増大の傾向にある。然るに之等小作農の負擔する小作料は極めて苛酷な條件下に置かれてゐて、前記の如き災害の頻發する近年の狀態では、小作農の生活は根本的に動搖するを免かれないでゐる。

第五農村金融の不備 農民生活の惡化は、必然的に農村に於ける冷酷なる金融業者の存立を可能ならしめ、農民はこれら金融機關に依つて次第に抜き差しならぬ狀態に引きずり込まれる。農村に於ける高利資本は、隱然たる一大勢力を形成してゐる。尤も近來一般銀行及び農民銀行の農村救済乗出し傾向は比較的注目するに足るものがあるが、未だ充分なる活動をなしてゐないし、從來の實例に徴するに、銀行資本は一部富農の救済に役立つのみで、現實に資金を必要とする中小農民に對しては、何等救援の實を擧げてゐないものが多いやうである。

第六農村手工業、副業の衰退 古代的生産様式に依存する支那農村の過剩人口は、從來農村に於ける手工業、家内工業に依つて僅かに維持されてゐたものであつたが、近來外國工業品の侵

入と、國內工業の發達とに依り甚しき打撃を蒙り、これ等手工業及び家内工業は漸次崩壊過程を辿つてゐる。

第三節 農業發展策

既に述べた如く支那國民經濟に於いて農業は支配的地位を占めてゐるに拘はらず、其の農業が近年叙上の如き諸原因に依つて根柢より動搖の兆を示してゐることは、これ取りも直さず支那經濟全般の衰減を示すのである。依つて支那が現に直面する全面的恐慌状態より脱出するが爲めには、先づ第一着手として農業經濟の振興を企圖しなければならぬ。即ち農民負擔の輕減、農村治安維持の徹底、排水灌溉設備の完備、農村金融の圓滑化、交通機關の發達、生産販賣機構の改善、耕作種類の取捨研究、品質の改良、優良種子の配給、耕作技術の改良等々。支那農業經濟を現在の重大なる危機より免かれしむる爲めに、採用さるべき方法は十指を屈するも尙餘りあるであらう。

しかし、斯かる個別的救濟方法は暫く之を置き、假りに概括的に之を見るならば、要するに現

在の支那の農業不振は、其の農業經濟の全様式が極めて原始的であり、自給自足を目標とする結果、其の生産物の商品性が著しく缺如してゐることに其の重大な原因を存せしめてゐるのであるから、支那農業經濟の根本的改革は、結局支那の農業をして斯かる消極的、自給自足の状態から脱せめることが必要であつて、之に積極性、市場性を與へることが刻下最大の急務であると云はねばならぬ。又農業品への市場性賦與は、其の海外輸出を盛んにする上に重大な關係を有つてゐる。

本來農業國支那としては、其の農業生産の進行を圖り、農民所得の増加を促す爲めには、何よりも先づ農産品の海外輸出を増進せしめなければならぬ。ところで農産輸出品は其の大部分が工業原料品たる性質を有するものであるから、支那農産品輸出相手國たるものは、先づ工業國たる事を要件とする。しかも其の工業國は國內に充分なる農業資源を有せざる國でなくてはならぬ。斯かる二つの條件の下に世界各國を通觀するに、此の條件に合致する國としては、日・英兩國が直ちに思ひ浮べられる。然るに農産品の輸出に於いては其の輸送中の變質、減損に依る損害率は工業品の輸出に比し、遙かに大であるのみならず、量的にも大なる船載面積を要し、しかも荷造

りは煩瑣であるし、これ等諸點を考慮に入れるに於いては、農産品の遠距離輸送は運賃其の他種種の點より見て極めて不利であると云はざるを得ない。即ち農産輸出品の仕向國としては、地理的に最も接近せる國を選ばなくてはならぬのであつて、此の點よりする時は、日・英兩國の中支那に取り最も有利な輸出國は隣邦日本でなくてはならぬ。

日本の工業は輕工業のみならず、重工業に於いても、製品の優秀と價格の低廉とに依り、近年飛躍的發展を遂げ、駁々として諸外國に進出し、各國をして今や「黄色商品禍」を叫ばしめてゐる程である。しかも國內には工業の斯かる飛躍的發展に應ずるに足る原料品の生産増加がなく、又或る種の原料に至つては全然これを國內に期待し得ない状態にあつて、工業國として、將來の發展に對し、可成り深刻な悩みを抱いてゐるものである。依つて地理的好條件を利用して、支那が其の農産品の販路を日本に開拓することは、極めて有利であるのみならず、しかも將來に亘る永遠性があるものと云はざるを得ない。

斯くて率直に云へば、支那の農業生産は、日本の工業需要に對應せしめる如き方向に進めることが、必要且つ有利であつて、之は同時に日本に取つても必要且つ有利な點と云はねばならない。

日支經濟提携の要點は、實にこゝに見出さねばなるまい。

では日支經濟關係の現状はどうなつてゐるか？ 此の點に就いて少しく考察の眼を投じて見よう。

我が對外貿易は、昭和六年十二月の金輸出再禁止を契機として頓に躍進し、殊に其の輸出貿易にあつては、各國が輸出減退に悩んでゐるのを尻目に、躍進的發展を遂げた。然るに斯かる好調の中にあつて、獨り對支輸出貿易に於いては反つて衰退の色を示して來たのである。いま我が對支輸出貿易の趨勢を表するに、次の如くである。

年次	輸出額	前年に對する増減率
昭和四年	三四六、六五二	(一)
同五年	二六〇、八二五	二五%
同六年	一四三、八七六	(一)
同七年	一二九、四七八	一〇%
同八年	一〇八、二五三	(一)
同九年	一一七、〇六二	(十) 定八%

右表に依れば、昭和四年（一九二九年）に於て三億四千萬圓に上つてゐたものが、其の後漸減し、昭和六年には一億四千三百萬圓、即ち六〇%と云ふ激落振りを示してゐる。しかも昭和六年以後の我が對外貿易の躍進的增加時期に至つては更に著しい減退を示してゐる。

一體、我が國の對外貿易上、米國と支那とは二大支柱と稱せられたのに、近年の斯かる對支輸出貿易の激減は誠に注目すべき事態と云はねばならぬが、之は一面支那國內に進行しつゝある經濟恐慌に依る支那農民の購買力減退に基くとは云へ、他面に於いては嘗て支那の指導者が全國的に行つたところの執拗なる日貨排斥運動の結果にも依るのである。此の事實は次の支那對外貿易上に於ける日・英・米の勢力分布の變化の跡を見れば歴然たるものがある。

支那對外貿易上に於ける日・英・米の勢力分布

	日本	米國	英國	香港
一九二九年	二五・四〇%	一六・一六%	八・四八%	一三・〇一%
一九三〇年	二四・六六%	一六・五二%	七・七五%	一三・〇七%
一九三一年	三三・三三%	一八・八五%	七・八八%	一五・八一%
一九三二年	一七・〇九%	二二・一六%	一〇・〇九%	二〇・七三%

一九三三年	一一・六三%	二〇・七九%	一〇・九三%	八・六三%
一九三四年	三三・三三%	三三・三三%	一一・〇一%	八・三九%

即ち一九三一年までは我が國は支那對外貿易上第一位を占めてゐたものが、同年以後は俄然衰退を始め、第一位はこれを米國に譲らざるを得なくなつた。地理的好條件・圓價の低落等の武器を擁しつゝ、斯くの如く敗退せざるを得なかつた裏面には、日貨排斥の如き「非經濟的」事情の存在した事を認めざるを得ない。

然るに前述の如く、日支經濟關係の相互依存性の大なるに拘はらず、かく日本の對支經濟進出が不合理なる原因に依り、敗北を餘儀なくせしめられてゐるといふことは、兩國本來の經濟的發展を阻害するも甚しいといはねばならない。斯かる不自然な關係に置かれることに依り、日本も相當不利益を被むるけれども、支那自身も亦更にこれ以上の損害を受けてゐるものである。最近支那經濟全般の極度の不況打開のため、對日接近論が有力化しつゝあるのも、斯かる見地よりすれば、寧ろ當然の勢ひであると云ひ得る。

翻つて思ふに、工業國日本として最も必要を感じる原料品は、棉花、羊毛、石油、鐵等である

が、現在の支那に於いては交通の不便、其他の點より、これ等を充分我が國に提供するに足りないのであつて、たゞ棉花に於てのみ近き將來に於ける有望性を認められるに過ぎざる有様である。

尤も日本の紡績原料として、支那棉を輸入する上には大體二つの難點があつて、其の利用は必ずしも日本にとり有利でないとの説も従來行はれてゐる。即ち第一の點は、品質であり、第二は生産額の點である。一般に支那棉はその品質粗剛で且つ夾雜物多く、紡績原料としては必ずしも適當であるとは云へないと云はれる。然し之とても従來の如き舊式な生産方法を廢し、科學的方法に依る栽培收穫方法の改善等を行ひ、以て其の品質の改良を圖ることは、必ずしも不可能ではないであらう。

生産額の點に就いても同様であつて、將來生産設備の改善、耕地面積の擴張、機械使用の増加等を行ふに於ては、恐らくかなりの増産を見ることは出来るものと信ずる。此の點に就いては過去に於ける北支の亞麻子、漢口の胡麻、青島の落花生等の實例に依つても大體之を推測することが出来る。

斯くて若し支那に於ける棉花其他の品質の改善と、生産額の増加とが行はれれば、自然にそ

れ等の對外輸出も盛んとなり、一般農民の貨幣所得を増加せしめ、其の結果、彼等の外國品購買力も豊富ならしめることが出来るのである。これは現世界恐慌打開の意味からいつても、誠に重要な意義を有するものであらう。

第四節 日本の援助

さて敍上の如き支那農業の改善が、日支兩國國民經濟に著しき好結果を齎らすとは云へ、支那の政狀の不安、農業生産様式の不適當、農村金融の行き詰り等を考へるに於いては、たゞ事態を此のまま放置して置いたのでは何等期待すべき結果を齎らし得ない。蓋し支那政府としては、凡ゆる方面に劃期的工作を施し、農民生活の安定及び向上を企圖しなければならぬのであるが、遺憾ながら現在の支那政府には、斯かる遠大な計畫を有効に施行すべき實力ありと思はれないのである。そこで支那としては勢ひ外國の援助を得て、之が實現を計らねばならないのであるが、經濟の破綻、政治の動搖は恐らく列國をして斯かる大規模の對支援助を躊躇せしめるであらう。この時に當り前述の支那農業經濟と我が工業經濟との相互依存關係よりして、日本をおいて此の援

助をなし得るものは他に存しないと考へられる。

斯かる我が國の對支農業援助は、其の方法から見て大體二つに分けることが出来やう。一は資本的援助、二は技術的援助である。

一に屬する具體案としては、支那の農業經營を單一經營より多角形經營に移し、棉花、小麥等の栽培の増加及び品質の改善を企て、之に我が國の技術的指導を與へること、而して之が爲めには優秀なる農村指導員を我が國より派遣し、從來の無統制なる生産様式を改善せしめることが急務である。

二に屬する具體案としては、經濟的方面に於て農産物の生産、販賣機構の充實改善を計り、一面農村金融の圓滑化を進め、特に農村産業組合の發達に依る資金運轉の途を考慮し、進んでは優良種子の貸付等をも行ふ必要がある。

以上の如き援助を行ふ場合、吾人の最も警戒すべきは日本の提供する資金が、支那の政治的方面に利用せられることであつて、もし斯る結果になれば、我が對支援助の美果を結ぶことが出来ない許りでなく、延いては列國に其の眞意を誤り傳へることとなり、彼等の猜疑心の的となるで

あらうし、他方また支那國民からも嫌疑せられるに相違ない。依つて資金の運用に就いては、特に適當なる管理及び監督機關を設け、嚴重に注意する必要がある。

一方我が國の立場に於いて見れば、斯かる對支援助は相當巨額の資本を毎年之に費消しなければならぬのであつて、現在の我が經濟界の狀勢から云へば、斯かる巨額の資金の捻出は必ずしも容易であるとは思へない。然し我が工業と支那農業との聯繫は、日本國民經濟發展上必要不可欠の云はゞ國策的目標であるから、此の意味からすれば之に相當額の資金を提供することは、何等躊躇に値ひしないものと云ひ得る。

仔細に考察すれば種々の方面より相當巨額の資金の捻出が可能であると思はれるが、特に余の見たところを以てすれば、現在の外務省文化事業費の一部分を之に流用することは、極めて妥當なるものと思はれる。同事業費は年額約三百萬圓の豫算を以て「所謂文化事業」を行つてゐるものであるが、從來の實績に徴するに、その結果は必ずしも大成功なりとは言ひ難い點もあり、又民國側に於ても案外歡迎してゐないやに傳へられてゐる。從來の文化は精神文化を主たる對象とし、物質文化に對しては甚だしく冷淡な取扱を爲し來つたものゝ如くであるが、今や躍進日本を

先導として、華々しき東洋文化再建の途上にあるアジア民族に對して、最も緊要にして且つ第一に着手すべきものは、實に物質文化の向上及び充實でなければならぬ。しかも物質文化の向上は當然に精神文化の向上をも齎らし得るものであつて、斯かる見地よりすれば、同事業資金の物質文化方面、即ち經濟的方面への振向けは其の本來の目的にも極めてよく合致し、且つ、日支兩國に永久的福祉を特に與へることとなるのであらうと信ずる。此の點に關し、朝野識者の熟考を促したいと思ふものである。

昭和十一年三月十四日印刷
昭和十一年三月十八日發行

日滿支經濟論
定價 一圓八拾錢



著者	木村 増太郎
發行者	佐藤 義明
印刷者	永種 晴
印刷所	大 洋 社

東京市芝區田村町五丁目二十三番
東京市芝區田村町五丁目二十三番
東京市芝區田村町五丁目二十三番

發行所

東京市芝區田村町五丁目二十三番

時潮社

振替東京三八九一〇
電話芝二二五六

現法の哲學

◇近刊豫告

木村龜二著 菊判上製 三・四頁

刑法學者としてその盛名を謳はれて居る木村教授は、同時に本邦屈指の法律哲學者であり、遠く歐米にもその蘊蓄を知られてゐる。小社は茲に教授に乞ふてその數多き論文中より粹を集めて本書一卷を編み、これを學界に提供し得ることとなつた。斯學に關し權威ある類書に乏しきわが學界において、本書の出現は正に汗天に沛雨を得たるものと言ふべく、斯學界に貢獻すること絶大なるものあるを確信する。

時潮社新刊書目

松本潤一郎著	社會學要綱	定價 一・七〇 送料 一・四〇
戸田貞三著	社會調查	定價 二・五〇 送料 一・〇〇
戸坂潤著	技術の哲學	定價 〇・八〇 送料 〇・四〇
小野秀雄著	現代新聞論	定價 二・六〇 送料 一・四〇
小野武夫著	近代村落の研究	定價 二・七〇 送料 一・四〇
小野武夫著	郷土經濟史研究提要	定價 一・二〇 送料 〇・八〇
近藤康男著	農業經濟論 <small>(資本主義と農業)</small>	定價 二・〇〇 送料 一・四〇
高橋龜吉著	農村經濟講話	定價 一・二〇 送料 〇・八〇
平野常治著	商業組織論	定價 二・八〇 送料 一・四〇

時潮社刊書目

中澤辨次郎著	都市農村相關經濟編	送料	定價	一・二〇〇
川西正鑑著	經濟地理學方法論	送料	定價	二・一八〇
瀧川政次郎著	法史瑣談	送料	定價	一・一三〇
小野秀雄著	圖解新聞發生史	送料	定價	〇・七四〇
法政大學五教授編	國文學選	送料	定價	一・一五〇
井上吉次郎著	秘密社會學	送料	定價	一・一八〇
ロウイ、フリフォルト著 青山道夫譯	國家及家族感情の起原	送料	定價	〇・八四〇
細川龜市著	日本法制史大綱上	送料	定價	二・一〇〇
細川龜市著	日本法制史大綱下	送料	定價	一・一五〇

也致豊島師範前
みとりや書店
電話大塚四八七

書名	時補経書
摘要	①
定価	180

32.2.19

